明治四十三年九月二十日發行

（明治二十一年本會創立）

婦人衛生雜誌

第二百五十號

私立大日本婦人衛生會

第三種郵便物認可 明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可 明治二十一年二月二十八日

婦人衞生雜誌

第二百五拾號目次

大日本婦人衛生會

十月例會通知

來る十月一日（土曜）午後一時半より今回に限り芝三田四國町東京高等女學校内（電車ハさつま原（三田）終點ニテ下車）に於て例會を開き左の講話有之候間御知友御誘引御來會被下度候也

乳房の話　　醫學士　河島右一君

明治四十三年九月

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衞生會 高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條　當支會は大日本婦人衞生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ随て社會全般の幸福を増進するを目的とす ●第二條　當支會は大日本婦人衞生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄居町五十番地に置く ●第三條　當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す ●第四條　本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を詳記し三箇月分以上の會費を添へ申込まるべし ●第五條　當支會に學術其の他の裨益を與へらるゝ人士を推して講師又は篤志賛助員となす ●第六條　當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし ●第七條　支會に左の役員を置く會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名 ●第八條　役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す又幹事評議員は役員中より會長之を指名す但役員の任期を一箇年とし再撰するを得 ●第九條　本會の特別賛成員を定員外の評議員とす ●第十條　當支會は毎月一回講話會を開き毎年一回總會を開く者とす總會に於ては講話の外役員の改選會務の報告等をなす ●第十一條　會員及賛成員の家族並に篤志賛成員は集會に參列するを得但時宜により男子の參列は謝絶することあるべし ●第十二條　本會々員は本會費の外別に支會費を要せす支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす ●第十三條　總て會費の徴收は集會の席上に於てするを例とす但三ヶ月分以上前納すべし ●第十四條　支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす ●第十五條　會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す ●第十六條　本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす ●第十七條　會員は服裝其他を質素にし集會の節は時間等を確實に履行すべし ●第十八條特に此規則に揭げざる者は本會の規則を準用す

事務所高崎市寄居町五十番地

高崎支會

私立大日本婦人衞生會 新潟支會規則

●第一條　本會は大日本婦人衞生會に屬し婦人衞生の研究を目的とし兼ねて一般慈善事業を爲すにあり ●第二條　當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員毎月金參拾錢通常會員同金貳拾錢支會員甲毎月金拾錢乙同金五錢 ●第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし ●第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衞生雜誌を配布す ●第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衞生慈善資金とす ●第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を選任す各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす ●第七條　支會は毎月六日通常會を開き衞生及び慈善に關する演説をなすべし ●第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を執行す ●第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし ●第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は賛成員となすべし ●第十一條　一般慈善事業の賛助天災事變の救濟の事務は役員會の決議によりて實施するものとす ●第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は可成く綿服を着用すべし ●第十三條　特に本規則に揭げざるものは私立大日本婦人衞生會の規則を準用す

明治二十九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しげ子方

新潟支會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんこと皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んこといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〻、衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を求めざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ來り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一同集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記し册子を編輯して會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす兹に本會旨趣の梗概を敘べて廣く江湖の諸愛姊に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會の會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續巻末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす　終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ケ月金三拾錢以上、通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ　但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし　但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く　會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け筆記諸雜務を掌る　幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ケ年とす但再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす　例會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し緊要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし

●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして隨意聽講せしむるものとす

●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々員に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）

●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず

●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと

●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事捺印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ケ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし　本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし

●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿册に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）

●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし　地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麹町區富士見町郵便取扱所宛）振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は懸く會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麹町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　羽田三緒子
同　岡田德子
同　高木錄子
同　山本多禰子
同　松平芳子
同　三浦敎子

評議員　石川貞子
同　岩下ゆか子
同　濱田捨子
同　長谷川仲子
同　服部繁子
同　仁禮壽賀子
同　西升子
同　土肥多越子
同　緒方悅子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　片山龜子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋孝子

評議員　田村きよ子
同　男爵夫人　南部限子
同　中濱芳子
同　山口貞子
同　子爵夫人　松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、高崎、米澤

本會特別贊成員（いろは順）

醫學博士　入澤達吉君
理學博士　石川千代松君
醫學博士　石原久君
醫學博士　石原喜久太郎君
理學博士　飯島魁君
ドクトル　飯盛挺造君
醫學博士　伊藤隼三君
ドクトル　伊澤信平君
醫學博士　伊東祐彦君
色川圀士君
岩井禎三君
藥學博士　石津利作君
醫學士　磐瀬雄一君
長谷川泰君
法學博士　鳩山和夫君
萩原彌四郎君
醫學博士　林作維君
原賢昭君
醫學士　岡本左武郎君
醫學博士　濱田玄達君
男爵　高尾新君

醫學博士　芳賀榮次郎君
西田敬止君
ドクトル　西山信光君
本田增次郎君
醫學士　鳥居春洋君
醫學博士　土肥慶藏君
醫學博士　遠山椿吉君
醫學博士　大澤謙二君
醫學士　大野豐太君
醫學士　大西秀治君
子爵　小笠原長生君
ドクトル　小此木信六郎君
醫學博士　岡田榮吉君
醫學博士　岡田和一郎君
恩田重信君
醫學博士　緒方正規君
醫學博士　大澤岳太郎君
醫學士　渡邊房吉君
醫學博士　加藤照麿君
文學博士　男爵　加藤弘之君
醫學士　河野衛君
醫學博士　河本重次郎君
醫學博士　金杉英五郎君
醫學博士　片山國嘉君
醫學士　賀古鶴所君
醫學士　堅田龜一郎君
醫學士　唐澤光德君
醫學士　甲野棐君
醫學士　米山彥郎君
橋井忠國君
醫學博士　高橋順太郎君
男爵　高崎正風君
高嶺秀夫君
醫學士　高田耕安君
ドクトル　高山紀齋君
藥學博士　田原良純君
醫學博士　田代義德君
醫學士　田村光顯君
醫學士　田村化三郎君

醫學士　竹中成憲君
藥學博士　丹波敬三君
法學博士　高木豐三君
醫學博士　男爵　高木兼寛君
理學博士　坪井正五郎君
醫學博士　土田卯三郎君
男爵　辻新次君
醫學博士　中濱東一郎君
醫學博士　長與稱吉君
藥學博士　長井長義君
男爵　南部寅男君
醫學博士　能勢靜太君
醫學博士　久保猪之吉君
醫學博士　栗本東明君
醫學士　栗本廣勝君
醫學博士　隈川宗雄君
醫學博士　吳秀三君
醫學博士　山田鐵藏君
醫學士　山田弘倫君
醫學士　山根正次君
ドクトル　山上兼輔君
ドクトル　松山陽太郎君
丸山長四郎君
ドクトル　富士川游君
布施正賢君
男爵　後藤新平君
醫學士　古川榮君
小高長造君
小西信八君
醫學士　寺田織尾君
醫學士　寺田豐作君
寺田勇吉君
醫學博士　朝倉文三君
子爵　秋元興朝君
足立寛君
ドクトル　朝山義六君
醫學士　淺田決君
醫學博士　佐藤達次郎君
醫學博士　佐々木政吉君
醫學博士　榊順二郎君

醫學博士　榊保三郎君
醫學博士　櫻井恒次郎君
醫學博士　佐藤三吉君
齋藤清文君
醫學士　稻川三男三君
醫學士　櫻井郁二郎君
ドクトル　佐藤運雄君
醫學士　佐藤德齋君
醫學士　澤崎寛制君
ドクトル　佐伯理一郎君
醫學博士　木下正中君
醫學博士　桐淵鏡次君
醫學博士　木村德衛君
醫學博士　北島多一君
醫學博士　北里柴三郎君
醫學士　北村精造君
醫學博士　北川乙治郎君
ドクトル　菊池循一君
醫學博士　三輪信太郎君
醫學博士　宮本叔君
宮本仲君
宮川保全君
理學博士　箕作佳吉君
醫學博士　水原漸君
醫學博士　三宅秀君
醫學博士　三浦謹之助君
醫學博士　三島通良君
三浦守治君
ドクトル　島田三郎君
醫學博士　志村城康君
島村俊一君
ドクトル　日高昂君
醫學博士　弘田長君
伯爵　土方久元君
醫學士　百瀬玄溟君
醫學士　森田正馬君
文學博士　醫學博士　森林太郎君
醫學士　瀧川德君
ドクトル　須田卓爾君

講演

腸窒扶斯豫防の心得（承前）

醫學博士　二木謙三

それで此窒扶斯の黴菌は何う云ふ場合には死ぬものであるか、卽ち吾々が窒扶斯の病氣を防がうとする前には如何にして窒扶斯の黴菌を殺すべきやと云ふことを研究しなければならぬ、そこで此蟲を研究して見ると此蟲が容易く死易い蟲であります、水の中に居れば魚子の樣に盛んに游いで居るが、是を水の外に上げて乾かして仕舞ふと直きに死んで仕舞ふ、例へば私の今持つて居る斯う云ふ樣に乾いたところの布片でありますと此の下の端に黴菌を附けて置いて、其上の方を持つて居れば之れで大丈夫でありますチフス菌は決して上つて來ることはありません、所が此布片が濡れて居ると其黴菌が手の方に上つて來る、濡れたところには可なり長い間死なずに居る、其處で大掃除をするには濕ぽい所の疊をあげて乾すとか或は臺所の方を能く乾かす樣に掃除をすると云ふのが必要になつて來る、特に黴菌は日光に當てゝ乾燥すれば一層早く死ぬのであります、太陽は吾々に向つて非常な働きをして下さる、吾々の日常食べて居る米は太陽の熱に因つて成熟するので太陽がなかつたならば吾々は生きて居られぬ、卽ち太陽は我々に食させて下さるばかりでなく我々に仇をする所の惡い黴菌をも殺して下さる、なんでも御同樣に御依賴をして著物でもなんでも干して戴くと健康上に非常に好いのであります。

さうしないと其黴菌の爲に害を被るやうになりますから能く大自然力を利用しなければならぬ、卽ち家

を建てるにも窓を多くして明りを澤山に取らなければいかぬ又室内は風通しを宜くして乾燥しなければならぬのであります、それから亦窒扶斯菌は熱に當てると斃れて仕舞ふ、何でも煮さへすれば大丈夫だと云ふのであります、食物も煮た物を上れば間違がないのであります、昔の昔には人間もなまな物を食べたものであります、例へば虎の兎を喰ふ如く、又兎の草を喰ふ如くでありましたが、種々の理由から今日では人は皆之を火食することになつたのであります、火を當てると悪い毒を有つた黴菌が皆死んで仕舞ふから、火に當てた物を召上れば健康上宜いのであります、生の刺身とか云ふやうな物は時節柄いけないと云ふことは其の爲めであります、それはなにもお刺身が悪いと云ふのではない、刺身でも腐つたものでなければ差支へないのですが、刺身は御存じの如く夏には直きに腐り易いのであります、其外チフス菌は千倍の昇汞水及び二十倍の石炭酸等に觸るれば忽ちに死滅するものですから患者を取扱つた所の手などは斯かる薬液にて洗滌すれば感染を豫防することが出來るのです、又酒精も同一殺菌力があります。

そこで窒扶斯の黴菌は斯う云ふやうな熱、乾燥、日光に當ると直きに死する様な弱蟲でありますが、併も何ぜチフス菌の壽命は又數千年の昔から今日に至るまで絶えるとなしに傳はつて來て居るか、又加之ならず今日の如く盛に繁殖して流行を逞ふして居るかと申しますると、又此蟲には其に適當なる特有の性質を有つて居るのであります。

先づチフスの黴菌の壽命は無限である即ちチフス菌は發育をして二十分内外にして年を取つて最早お婆さんになる、黴菌がお婆さんになると大自然の不可思議の力によつて割れて二つとなる、而して不思議なことは割れた二つは親と娘に非ずして二つ共若き娘であることである、即ち一人のお婆さんが何時の間にか二人の娘と化けるのである、而して二人の娘が年取つて二人のお婆さんになると今度は四人

の娘と化けるのである、即ち斯かる黴菌は老いて死すると云ふことなくして、再び一人が二人となつて且つ若がへるのである、それであるから幾千年昔にあつたチフス菌と今日ある所のチフス菌とは先祖と末孫の關係でなくして同一物である、即ち幾千年昔の黴菌は長生きをして今日迄生きて居り又未來幾億年となく生きて居るであらうそれであるからチフス菌の壽命は無限であり且つ若しチフス菌に口があつたならば幾千年此のかたの世界興亡の歷史を物語らして聽くことが出來るであらう、斯くしてチフス菌は鶴龜にも優つてお目出たい菌である、若しも彼等がよき菌であつたならば實にお目出たいことであるが、惡い菌であるから所謂憎まれもの〻長生きである。

チフス菌の繁殖　チフス菌は外界の障碍によつて死する外は年寄つて死することもなく只殖へる一方であるが、其の殖へる早さは何れ位であるかと言ふとなか〱早い樣にして遲く又遲い樣にして早い、凡そ二十分か〻ると一個の親が分れて二個の娘となる、夫から又二十分經過して二個が四個となる、又二十分經つて八個になると云ふ工合に分れて行つて二十四時間殖えたならば幾個になるか　もと〱一疋の黴菌が二十四時間殖えて行つたら實に數ふることが出來ない程澤山の數になります、併しながら一個が二個になるのに二十分か〻るから、二十四時間か〻つても左樣澤山になるまいと思ふが、どうでしよう、今一つ計算して見ますれば先づ斯うであります、一時間に何遍分れるかと言ふと一時間に三回しか分れぬがそれが二十四時か〻ると一晝夜には丁度七十二回分れることになる、一が二個づ〻に七十二回分れたならば總計何個になるか一個が二個づ〻に十回分るれば千となり二十回分るれば百萬となり三十回分るれば十億となり四十回分るれば一兆となり五十回分るれば千兆となり六十回分るれば百垓となり七十二回分るれば二十二萬八千垓と云ふ莫大の數となる而して斯かる大なる數は仲々吾々の想像に浮ば

ぬ故今たとへを取つて考ふれば、若し假りに私が三十二萬八千刧粒と云ふ數の米粒を持つて居つたならば私はどんな金持でありませうか、一寸之を米の俵數に直して見ましよう、是れは私が物好きに一俵の米粒を計算をして見ました事がありましたが、一俵の米粒は二百六十萬粒でありますから二十二萬八千刧粒あると米一千兆俵となる、之を世界の人口十億萬人に分ち與ふれば一人毎に百萬俵づゝ與ふることが出來、之を一人一日五合づゝ食ふと見れば一年四俵半にして百萬俵あれば二十二萬年食ふことが出來る、即ち私が二十二萬八千刧粒の米を持つならば世界の人口十億萬人を二十二萬年食はして養ふことが出來るのであります、是れで始めて斯う云ふ繁殖の烈しいものは世界にないと云ふ事が諸君が想像が出來ませう。

又其所で黴菌は髪の毛程の穴に九萬個揃つて入る程の小なるものなれども輕蔑の出來ぬと云ふことも御分りになります。

チフス菌の毒力　それで斯う云ふ風な烈しい繁殖力を有つて居る所のチフス菌の其の毒力は何うであるかと考へて見ると此黴菌には一つ〳〵に又恐ろしき毒を有つて居る、丁度河豚を食べると毒に中つて死ぬと云ふのも、あれも一つの毒で又亞弗利加の毒蛇に咬まれると毒が廻つて死ぬと云ふ、さう云ふ樣な毒を此の小なる黴菌も身體の中に有つて居る黴菌の體は恰度皮の嚢の樣になつて居て其中に毒を包んで居るので、黴菌が生きて居つて皮の嚢が毀れなければ毒は嚢の中に入つて居るから人間に害はない、然るに黴菌が人間の抵抗力によつて殺される時に毒を出して行くのであります、黴菌によつては又例へば實布的里の如く、生きながら毒を分泌するものもあります、チフスに於ては之に反して生きて居る内には毒を出さずして、人體内にある黴菌を殺すところの殺菌素と云ふ物質に遇つて黴菌が殺されて死ぬ其時に自分の體から毒を出して死んで行くのでありますから、其毒に人間が中毒して熱が起つたり譫語

を言つたり身體が衰弱したり遂には心臟痲痺をも起したり致すのであります。

チフス菌の侵入門　さう云ふ恐ろしい黴菌は何處から入つて來るかと言ふと先に申した通り唯口からばかり入る、古人は禍は口より出づと言はれて居りますが今日の禍は口より入つて行くのであります、兎に角口は禍の門であります、其他の病氣例へばペストの如きは重に皮膚より入るものでありますがコレラ赤痢並に窒扶斯は只口からばかり入つて行くのでありますから諸君が食物さへ御注意下すつたならば此黴菌に罹らずに濟むのであります。

チフスの病的作用　それで口から入つたものは體の中に行つて何う云ふ病的作用を發すかと言ふと先第一に口から入つて來るところの黴菌が人間の食道を通りて胃より腸に入るか或はそれより前に咽頭を通る時に扁桃腺を破つて夫より入る、扁桃腺とは能く小供等の咽頭の痛い時に腫れる所の咽が腫れた人が眞綿の襟卷をして居られますが彼れは鼻の奥より咽頭の通り道の兩側にあるものであつてチフス菌は先づ其扁桃腺を破つて體の中に入つて來る、此扁桃腺より入り兼ねた黴菌は遂に胃の中に入る、胃の中に入ると胃の中には胃酸と云ふものがあるから黴菌が之れが爲めに殺るゝので弱つて仕舞ひます、それであるから其處にグズ〳〵して居つては黴菌も閉口して仕舞ふから其處は成丈早く通過して腸の中に入る、腸の中に入ると其處は最も多くの黴菌發育に適する天國でありますから其處で得意に繁殖して直きに腸の淋巴腺に入つて其よりズット體の中に侵入するのであります、それで體内に入つた黴菌はそれから何處へ行くかと云ふと血の管に入つて細胞と〳〵の間を自由に通拔けて行きます、何處へでも巧みに潜つて行きます、而して其體の中には黴菌の棲み好い場所と住み惡い場所とがあります、其棲み好い場所は何處かと云ふと、體中の淋巴腺であります、次には骨の髓の中に入つて繁殖する或るものは又先きにお話致した脾臟に入りて繁殖し或るものは又肝臟

の中に入つて行く、肝臓とはお腹と胸との間にある大きな臓器でありましてよく人の云ふお酒を飲むと肝臓病に患ると申します所で、斯くの如き大切な臓器に入つて十分に繁殖する併し初めの内は何も病的症状を起すことなく進行して夫が十四日間經過致しましたら前に申したより更に幾萬倍と云ふ大變な數になつて直きに溢れて仕舞ひます、溢れたものは再び血液の中に入つて今度は全身に廣がらんとする、其時に初めて病的作用を起し寒氣がして熱が出て來る、之を發病と稱へますが、チフス菌が侵入してより發病に至る迄の十四日間は深く臓器の中に潛んで居つて孜々として繁殖に努めて居る故に此の期を稱して潛伏期と申します一朝戦が始つても黴菌側には何時でも兵隊をずん／＼繰出せる様に戦鬪準備をして居る時期で、其の間二週間あるが、身體の方では斯かることあるべしとは夢知らずに健康者と同じく立ち働いて居る甚だ險呑な時期であります久しからずして戦が初まる、ぞく／＼寒氣がして熱が出て來る、夫から窒扶斯と人間の體の戦爭になつて來る、人間の體の内には此窒扶斯菌が戦爭を仕掛けて來るから、是では耐まらぬと言つて徐々に應戦を開始するそれで先第一に人間の血液に解けて入つて居る所の黴菌を殺す物質即ち殺菌素なるものがあるから其を浴せ掛けると同時に他方には血液中にある白血球と申す細胞が出て來てチフス菌を喰ひ盡して之を消化して仕舞ふ、そうすると窒扶斯菌は段々死んで行く併しチフス菌は人間の體の臓器の中に十四日間も繁殖しつゝあつたのでありますから、いくら殺されても仲々盡きぬ後から／＼黴菌が繰出されて來る、其勢は中々猛烈なものであつてお互に負けたり勝たりして居る中に殺されたところの窒扶斯菌は自分の體から多くの毒を出して行く其毒が血に交つて行くから段々と熱が昇つて來てもう四十度位の熱になつて來る、最早其時には患者夢中になつて仕舞ふ、其時になつては家族の人も醫者も非常に心配をするのであります、最早其時には戦正に酣

なる時であります、さう云ふ熱が強い時期が二週乃至三週經過して行きますと云ふと今度は天下分目の戰となる、最も危險な所で、若し之で黴菌が段々と負けて行けば宜いが、勝つて行く時には大變になる、腸がたゞれて出血して來る、時としては腸穿孔と云ふて腸に孔があいて死する、然らざるも榮養は漸次衰へる、腦が冒さるゝ心臟が弱つて死する、併し若し人間の戰が勝つときには、菌が殺され、殺され殘つたものは逐ひ出されて便や尿と共に遂には不淨に排泄され身體は漸次健康に向ふのであります、而して其の兩便に出されたチフス菌は又機會を待ちて健康者を襲ふのでありますから一人の窒扶斯患者がありましたならば其の糞便の取扱方を餘程大切にしなければ數人の感染者を出すのであります。

大抵何人位死ぬ　かと申せば此の病氣は實に恐ろしい病氣であつて百人の中で十五人から三十人位までは死ぬる、即ち三分の一は死亡する即ち一家に兩親と子供とがチフスにかゝつたならば其の內誰か一人が缺ける割合になる父が缺けても母が缺けても子がかけても餘り宜しいことはありませんから十分に豫防上の注意を要するのであります。

チフスの診斷　それから豫防と申しても第一診斷が付かなければ豫防が出來ませぬ、窒扶斯の患者であるか、普通の風邪であるか初は熱が出たばかりでは分らぬのであります、是は醫者の仕事であつて、醫者の方ではチヤンと見分ける法があるのですけれども、先づ誰れにでも凡そ解る方と申すのが第一に斯うです、例へば寒氣がして來る熱が上がる、さうして二三日寒氣と熱と續いても其切りで冷めれば窒扶斯でない、窒扶斯になると熱は二週間も三週間も續く、若し五日間以上も熱が下らなかつたら是は窒扶斯ではないかと思はなければならぬ、斯う云ふ見當であります、二には普通の風邪の時分には鼻水は出ますがチフスには鼻水が出ませぬ三には此窒扶斯の始めには熱はあるが唯何となしにゾク／＼するだけ

で體には何にも變りはない、例へばインフルエンザに罹ると頭痛や腰や手の痛みが非常に強くなつて來るが、窒扶斯は其樣なに痛みはないのであります、併し痛みがあるから窒扶斯でないとは言へぬのであります、窒扶斯でも痛みを有つて來る事もある、又腸が惡くて熱が出る即ち便祕の爲め又は下痢の爲め或は胃が惡くて熱が出ると云ふ事がありますが、此場合には大抵二日か三日で熱が下るのであります、若し三日以上熱が續いたならばそれは窒扶斯ではないかと思つて御醫者さんに見てお貰ひにならなければなりませぬ、醫者の方では、それぢや何うして診斷を付けるかと言ふと先第一に黴菌を捕まへて來るのであります、それは何うするかと言ふと其患者の耳朶などから數滴の血液又は肘靜脈から針で一乃至二立方仙迷の血液を取つて來る、血の中に黴菌が混つて居るかどうかと云ふことを見るので、先づ其血の中から黴菌を培養して見る、若し黴菌の數が餘り少ない場合には僅かの血液では分らぬ故腕の眞中にある太い靜脈などに針を刺して少し澤山の血を取るのでありますが、それは血を取つても決して身體には害がないのみならず、時として澤山に血を取ることによつて熱が下り病氣が早く直る樣のこともありますから注意してやれは全く請合でありますさう云ふ風にして窒扶斯菌の有無を檢査するのであります、此處にお目に掛けますのは其血から培養した窒扶斯菌であります、斯う云ふ風に澤山入つて居るのであります、それで初の時ならばそれで診斷がつく、併し第二週以後になると患者の血液の中にはチフス菌に敵對する物質が澤山に出來る爲め菌は血液中に這入つて居ることが困難になる、此の時には血液から菌を捕へることが段々六づかしくなる其時には醫者の方では何うして診斷を付けたら宜いかと申しますと、此のチフス菌に敵對する物質即ち免疫素なるものが人間の體の中にあるかないかと言ふことを試すのであります、若し夫があれば此の患者が窒扶斯であつて夫れがなければチフスではないと云

ふのであります。

是を試すには何うすれば宜いかと言ふと窒扶斯の疑のある患者に發泡膏を貼りまして、出來る所の水泡を破つて其處から液を取るのであります、さうして兼てより養つてあるところの窒扶斯の黴菌をもつて來て之を適當なる液中に游がして置き之に只今取つた發泡液を或る割合に混ぜますと云ふと窒扶斯の黴菌は其の免疫素に負けて仕舞つて是迄活潑に泳いで居つたところのものは急に運動を停止し隣同志附き合つて千個も萬個も一つの球に凝まつて仕舞ふ是を凝集反應と名付ます、それが健康者より得たる發泡液であると云ふと窒扶斯菌とまぜても凝集反應は起さないのであるから其れでチフスの診斷はつくのであります、その反應は後で御目に懸けますが斯う云ふ風に窒扶斯菌が皆凝集して粒々になつて來るのであります。

パラチフス　そこでモウ一つ皆さんに御注意して置かなければならぬことは、此の窒扶斯は近頃發見された所のよく窒扶斯に類似して併も違つた黴菌より來る所のパラチフスと云ふものと區別をせねばならぬことである此のパラチフスは昔は皆窒扶斯と同一視されて居つたものであるが今日になつて黴菌を調べて見ると、パラチフス患者よりは窒扶斯と能く似て居るが併も全く異つたところの黴菌が見付けられたのであります、併も其の新しく發見された菌に二種類ある、即ちパラチフスベー菌及びパラチフスアー菌と云ふ二つであります其パラチフスと窒扶斯とは少し違ふところの働きをするのである、それは何う云ふ風に違ふかと言ふと、窒扶斯患者に發泡膏を貼つて得たところの液を取つて窒扶斯菌を加へて見ると云ふと前の通り凝集して仕舞ふが其の同じ液をパラチフス菌に加へて見ても變化を呈することなく自由に動いて居るのである、其と反對にパラチフスに患つたところの患者の發泡液を取つて參りまして、パラチフス菌と混ぜると皆凝集して仕舞ふが今度はチフス菌を凝集せしむることがない、それでパ

ラチフス菌と窒扶斯菌は別の黴菌であると云ふことが分つた、之れと同様にパラチフスベーとパラチフスアーとの間にも立派な差別がある、其處で窒扶斯と能く似寄つた病氣の中に病原菌が三色あると云ふことを諸君に御注意を願ひたい。

それではパラチフスと窒扶斯と病氣の上にどう云ふ差があるかと云ふと、パラチフスの方は窒扶斯より少し輕るいのであります、でありますけれども、パラチフスにも重い場合がある、窒扶斯にも輕いことがある、それは一様には言へない、素人には其見解は一寸付きませぬのみならず一寸見たゞけでは醫者にも又臨牀上ではパラチフスであるか、窒扶斯であるかと云ふことは今でも分けることが困難である併し黴菌を檢べるか又は發泡液を取つて檢べると明かに區別がつくのです、其所で窒扶斯に罹つたなら先づ重い方の用意をなさつて早く醫者にお出でになるのが必要であります、さうして醫者の所へ御出でになると醫者がチャンと分けて、さうして是はパラチフスだと言つたら大抵大丈夫でありませう。

チフスと死亡　それで此パラチフスに罹つて死ぬ數が百人中に一人か二人しかありませぬ、それが窒扶斯であると百人中に十五人から三十人は死ぬのであるが何時の流行でもパラチフスは輕るいかと言ふと決してさうではない、時としては重こともありますから何んでもさう云ふ兆候があつたら決して忽にしてはなりませぬ。

チフスの療法　それから療法はどうするかと言ふと療法は醫者のする仕事であります、先一番初めに注意せねばならぬことは、餘り下熱劑を澤山かけてはいけないのであります、アンチピリンとか、アスピリンなどを澤山用ひますと必ずではないが却て重い窒扶斯になつて仕舞つて今度は癒らなくなつて仕舞ふことが多いから無暗に熱冷しを上つてはいけませぬ、能く御注意なさい、二日三日の熱の盛んなときは熱冷しはセイ一杯一日か一日半位用ひれば普通の風邪ならば大抵熱が冷めますが窒扶斯の時は一度熱

冷しを飮むと次の日は尙ほ一層熱が高くなつて來ると云ふ虞がある、それから治療上でモウ一つ誰でも注意しなければならぬ事は其病に罹つたら體を極く安靜にしなければならぬ、それから精神も靜かにして居らなければならぬ、之を證明するには種々の經驗又は試驗がありますが先づ一口に申すと前に申した、體と黴菌の戰の一件で大變に困る、體の中で敵に當る窒扶斯菌と身方の白血球や殺菌素等ドン〳〵戰つて居るから其戰の最中に精神や體を動搖させては少し困る、例へば露西亞と日本の兵隊が戰爭に出懸けて行つても、内は御婦人方の手に依つてチヤンと治まつて居ればこそ少しも顧みるところなく勢ひ好く働ける、露西亞の樣に外國と戰爭をして居るにも拘はらず、内亂が起つたりするやうでは戰爭をして居る兵隊も氣乘りがせぬと同じことである、何んでも内が靜でなければ戰場で華々しく戰ふことが出來ぬのであります、のみならず又身體を動かすことにより腸のたゞれた所より血管が破れて腸出血を起し又は腸が破れて腸穿孔を起して其れが爲めに卽死することもある、それで體の安靜は動かずに居ればよいが精神の安靜は平世に鍛練を要す、大和魂は病氣の戰爭にも必要であります、若しそうでないと、いざ病氣と云ふ時に慌てることになる、之を落付けるには、この場合ばかりでなく病の時にも能くさう云ふ心掛をしてあきらめが必要である卽ち病は醫者に任かせ生命は天に任かせて置く覺悟が必要である卽ち出來るだけの養生や療法を盡してそれで死ぬと生きるとは天に任せるより仕方はない、幾ら考へても眠らずに考へて居つても髮の毛一本でも自分の力で伸ばすことは出來ない、心配をして髮の毛の白くなつた例もあり、又病氣の場合は自分で幾ら心配しても生命を取留めることは出來ない却て心配によつて生命を縮めた例もあるから、それは天災とあきらめて、唯其道を講ずるより外に仕方がありませぬ。それは醫者の命令に從ふより仕樣がありませぬ。

次に人體が能く戰に勝つた時には熱は下つて仕舞ふ、黴菌は殺され又は追放せらるゝ其時には所謂戰後の休養である、體の内には澤山の榮養物が欲しいのであります、食慾が亢進する人の物を取つてまでも食べたがる、コツソリ夜起きて行つて盜んでまでも食べたい、それ位食べたくなる、それは體の中の要求から來るのであります、それだけ必要でありますけれどもそれを無暗に欲するが儘に與へると云ふと今度は酷い目に遇ふ、それは丁度兵士が戰から還ると、其内善からぬものが戰勝の爲めに餘り慢心を起して酒舗に入つて醉ふて自慢を云ふて威張ると同じです、勝つて兜の緒を締めなければいかぬのであります、此身體の中の事も此社會の狀況と少しも異らぬので、皆さんが試驗が濟んで免狀をお貰ひになる、大變能く出來たと褒められると其翌年は餘り成績が良くないのと同じことであります、それであるから其處でもう一つ勉强しなければならぬと言つて奮發をなさるのと同じことで、病氣が癒つてお腹が減つて食べたいのは誠に結構でありますが、今一つ踏張て辛抱をなさらなければならぬのは其處であります、もう少し快いとあんな醫者はぐず〳〵して居るからいけない、斯んなに宜くなつても御飯も食べさせて呉れないから、お腹が減つて口を利くのもいやになると云ふ、併し此の時に思ふ存分食べた爲めに再發をした例が澤山であるから其處が注意をしなければならぬ所である、斯う云ふ時には決して醫者ばかりに任して置かないで御家族の方も一層御注意なさるのは勿論の事でありますが、其時に何處の某が食物を食べて振返して、さうして到頭果敢なくなつて仕舞つたから、此處一つ御辛抱なさい、マア辛抱なさらなければならぬと言つて止めなければならぬのであります、其時になつては看病をなさる皆さんの治療法が效を奏して始めて完全に直るのである、所が夫が敎育のない者は淺墓なものであります。

病院などに入つて居ると、患者は其面會に來る人每

に唯もうお腹の減つたことばかり言つて聞かする、そうすると面會に來る人も又マアお可憐さうに、此病院は官費だからこんな酷い取扱ひをするんでしようと云ふやうなことで、今度來る時にはパンかカステーラでも隱して持つて來て病人に食べさせる、さうすると的面に其のたゝりが露はれて來る、熱が上り病氣は再發するのである、其處で病院の受付の者は面會人を八ケましく吟味をするのであります、あなたは何か見舞物を持つておいでになるなら看護婦の手から差上げますから置いて居らつしやいと言ふと、私は何にも持つて參りませぬ、其袂が膨れて居りますが何か入つては居りませぬか、是は何んでもありませぬと云ふ、夫に就いて面白い話が御座ひますが、或時面會人が腹卷の中に餡パンを八ツばかり入れて隱して居りましたのをとう〳〵見附て取上げられましたことがあります、今一ツ哀しき例は或る時一人の職人體の人が入院して居りました、其所にまだ新婚の新造が見舞に來た、患者は空腹を訴へて次に來る時には內證で握飯を持つて見舞に來いと命じた、新造は之を拒んだ患者は亭主の云ふことを聞かぬと全快の後には離緣にすると怒つた、其所で憐れなる新造は止むを得ず隱して握飯を持つて病室へ這入つた憐れなる患者は悅んで食べた、其結果は再發して遂に死にましたことがありました、患者もそれ位せつなさを感じるのであります、よそ目にもそれ位お腹が減ると云ふことを想像されるので、危機一髮のところで命を落すと云ふことになるのでありますから、其時には醫者も家族も本當に眼には淚であるけれども、心は鬼にしてもう一日〳〵と辛抱さして行くと云ふのであります、是は素人の心得べき療法の一般であります。

（以下次號）

叢談

祖先の淨穢

祖先の淨穢とは稍〻妙な題でありますが、西洋のある雜誌に、西洋人自ら、餘り自慢でもないが、我儕の祖先は、淸潔と云ふ點については、どうも模範にはならぬといふて、種々不潔の例を擧げて居るのを讀みました。飜へつて考ふるに、我々日本民族の御先祖の生活法について觀察致しますと、これとは反對で、誠に淸潔を貴んだことが解るのであります。その淸淨なることは、たしかに我儕の模範とするに足るのであります。その方法こそ文化の進步と共に變化して來ましたけれども、身心の淸淨を貴ぶ所のその精神は古來衰へたことがない、而して今日に至つては學藝の進步、醫學殊に衞生學の進步に依てます〳〵淸潔法が合理的に行はれるやうになつて參りましたのは、誠にこれは誇としてよいことゝ存じます。扨てその西洋人の祖先等の不潔であつたと云ふことは、彼のモンテーヌが、沐浴の健康に效あるものなるところを唱へて、その當時の人々を痛く攻擊した、と云ふものは、その頃の人間の不潔なること、手足は汚垢の塊を以て被はれ、毛孔は脂の爲に閉がれて居るといふ有樣であつたからであります。殊にその甚しかつたのは、十六世紀から十七世紀でありませう。一寸今その一例を擧げて見まするならば、彼の有名な路易十四世王が、其の華な御宮に於いて、神々しく御裝束遊ばされてダイヤモンドの光もきらびやかに、鏡の御廊下に出御遊ばされる時にも王は、朝に御手水も召されなかつたと云ふ話である。又ベルサイユの華やかなること實に目もあやなるばかりで、往々一萬位の人の集まることも屢〻あつたが、石鹸とか海綿とか云ふやうな、身體淸潔法の必要品は丸で知られて居らなかつたと云ふ有樣

で、洗面盤や浴槽などは、頗る無用の長物視されて居つた、若し洗面鉢があるとすれば、それはほんのコップ位の大さのものに過ぎないのであります。既に此の如く、手水をつかふこともなければ、沐浴することもないのですから、從つて風呂場とか湯殿などいふ設備もなかつたのであります。而して御城の屋敷内へ行く時には、皆革で拵へた大きな傘をさしたものなそうです。これは何の爲めかと申しますと、窓々から色々な臭い物を擲掛けられるから、その用意だといふことであります。これについて斯う云ふ話があります。ある時太子が御出門に成ります時に、看樓の上より立派な人物の中からザアッとばかりに灌ぎ掛けましたが恰もこれが、太子の御輿の上に直接にかゝつたのであります。然し幸ひにこれが隨從の施與者と他の二人の肩に懸つただけでありましたが、ヅブ濡れに成つたので大急ぎで退出して、すつかり裝束を著代へなければならなかつたと云ふ事であります。これ等の話で見まするとさしものベルサイユの御苑も、まるで宏大な不淨場とも云ふべき有樣で、宮城其ものさへも、實に胸が惡くなるやうでありまして、途々至る處、不潔物に滿ちて然もそれが、王樣の寢殿の前にあると云ふすがたで、體格肥滿の衞士共は、隔の壁の直ぐ後ろに住んで居つて、煮炊をしたり食たり寢りゴロ〳〵して居つたものであります。而うして、王子、王女を初め、殊遇を蒙むつた人などは、牝牛、山羊、驢馬などを自分〳〵の部屋の中に引き入れることを許されて居りました、これは動物の溫い乳を直に飮むことの出來る爲めだと云ふことであります。これは獨逸のある雜誌に書いてあつたので、事柄は佛蘭西のことばかりでありますが、獨逸、英吉利とて餘り變はなかつたらうと察せられる、否もそつと甚しかつたものと想像されるのであります。

これが十六、七世紀の頃と申しますから、我國では後柏原天皇の頃から東山天皇の頃まで、卽ち足利の末から、德川の五代目綱吉將軍の頃までに亙るので

あります。實に群雄割據の時代、世は苅菰の如くに亂れた時から、漸く治まつて、いよ〳〵大平を謳歌するに至ると云ふ時代迄で、足利將軍の金閣、銀閣、花の御所の贅澤も夢と過ぎて、大戰亂の後に一時桃山時代と稱するやうな一種奇妙な粋な時代もありましたが、忽ち亂れに亂れて遂に德川時代に入りまして、未だ太平の極點には至りませんのですが、此間に於ける將軍或は諸侯の城や屋敷の狀態を見ましても、決して前のベルサイユ式ではなかつたと思れます、一寸考へましても第一金閣寺、銀閣寺など〻申しますものは御承知の通りあれは殆ど、茶の湯のために建たやうなものであります。茶の湯と申しますれば、今日の如く衛生思想のまるで發達して居らぬ時代ではありまするが、兎に角出來得るだけの、清潔法が講じられて居つたのであります、我邦では古來何れの時代でも、いかなる事にも精神の潔白と周圍の清潔とは相共に貴ばれたので、贅澤と云ふことに至つても、必ずこれと同時に清潔と云ふことに心を用ひられ居ります。これは決して十六世紀や十七世紀から始まつたことではない、西洋人などはまだ森の中で、熊や狼と同居して居つた頃から、已に發達して居つた處の我國民の美風であります、卽ち平安朝時代と言はず、奈良朝時代と言はず、ズット溯つて、神代の時分からして已に不潔を厭ひ、清潔を殊の外貴ぶ風があつたのであります。それは只今まで傳つて居るところの最も古い神話、傳說、記錄を見ますればよくこれが分るのであります、例ば祝詞を始め古事記、書紀等を見ましても、到る處に吾々祖先の、正直と清潔を貴び、虛僞と不淨を惡んだことが見えて居ります。彼の大祓と云ふ儀式が年に二回行はれますが、これは隨分古いことであります、其時の祝詞は大祓の祝詞と申して延喜式に有りますが、實に詞も莊嚴なもので、我國の文學、宗敎、歷史の上にも重要のものであると申すことでありますこれは抑も如何なる所から起つたものかと申しますと、伊邪那美命がお亡くなりになつた時に、伊邪那

岐命が黄泉國までわざ〳〵御出になつて、伊邪那美命にお逢ひになつた、然るにこの黄泉國は、誠に不潔極つた處でありまして、いろ〳〵な怖しい目にお逢ひになりましたが、やがて黄泉國より御歸になりますと、早速大清潔法を實行されました、これが所謂大祓の始であります。卽ち古事記に左の如く記して御座います。

コヽヲモテ、イザナギノオホミカミノ、ノリタマハク、アハ、イナシコメ、シコメキ、キタナキクニ、イタリテアリケリ、カレ、アハ、オホミマノハラヒセナ、トノリタマヒテ、ツクシノヒムカノタチバナノヲドノアハギハラニイデマシテ、ミソギハラヒタマヒキ

このイナシコメ、シコメキ、キタナキクニと言ひますのは、實にたまらぬ、厭やな醜い穢い國と云ふことで、卽ち黄泉國の有様を形容したもので、前に述べました、歐洲の例の如きも、直ちにこの形容詞を使つてよからうと思はれます。オホミマノハラヒとは、卽ち御身の禊で、その穢を拂はるゝこと、ミソギハラヒは身滌祓の意で、潔身或は身祓なども書きます、つまり全身浴、全身洗滌法であります。斯様な次第で伊邪那岐命は、その御身に著けてお出になつた杖を始めとして、一切の衣服、冠より、手に著けて居られた手纏までも、悉く水中に投げ棄て、身祓を遊ばされた。其時に此等のものを順次に脫ぎ棄てられる時に、その都度一々神様がお出來になつて、都合十二名の神様が生出でたと申ことでありますが、これは定めし、皮膚病、又は傳染病などの神様或はその豫防の神様方であらうかと推察されます何人でも衞生上疑はしいことのあつた時には、家にお歸りになつたならば、伊邪那岐命式にその蝙蝠傘でもステッキでも、日光に曝し又はその柄の所を消毒液で拭き、衣服の塵埃は玄關前で掃つて、それから風呂に入る、少くとも手足や顔乃至口をよく洗つて別の衣服に著更へますならば、結核、窒扶斯を始め種々厭な皮膚病の神様のお著きになるのを免が

れ、健康、衛生の神々の御加護に預ることが出來るだらうと信じます。話が少々横にそれましたが、その次にいよ〳〵河の瀬に立つて全身浴をなさるときにも種々の神様がお出來になつた、即ち初めに八十禍津日神、大禍津日神が出來て、その次に神直毘神、大直毘神と云ふのが現はれました、而して前の方の神様は『カノ、キタナキ、シキグニ、イタリマシ、トキノケガレニヨリテ、ナリマセルカミナリ』と云ひ、後の方の神様は『ソノマガヲナホサムトシテ、ナリマセルカミ』と申しますから、八十禍津日、大禍津日神の方は、皮膚に附著して居る無數の病原物、その他塵埃、脂垢などを洗滌して出來た神様であつて、神直毘、大直毘神と云ふのは、所謂冷水摩擦を行つた時に、身體の淸潔になつたのと、皮膚神經の適度の刺戟と、血行機、代謝機の佳良の感作に由つて、身心の爽快を覺ゆる時に出現された神樣であると云ふことは、誠に明かなことであります。これは決してこぢつけではなからうと思ひます。本居先生の古事記傳を見るまでもない、私は彼樣に衛生上の神樣として、能く合點が出來る積りであります。本會の會員の方々も私の說に御贊成被下て、常に此等の神々に依て健康を維持し、身心常に爽快ならむことを希望致します。大分長い說敎になりましたが、序ですから、もう一つ欠伸を願ひまして、本題に移つて、直ぐ完結に致したいと思ひます。それから伊邪那岐命は、左の御目をお洗ひになつた時に、天照大御神がお出來になり、右の御目をお洗ひになつた時に月讀命がお出來になり、御鼻をお洗ひになつて建速須佐之男命が成りましたと云ふ譯で、八十禍津日神以下都合十四柱の神樣が、その御身を滌ぎ玉ふことに因て出現されたと申すことであります。勝手な說を立てましては、罰が當りませうかなれども、本統の神道は存じませんので、遂ひ衛生的の解釋になるのも止むを得ぬ次第であります。兎に角、此處に現はれた神々を御祭になるならば、彼のトラホームその他眼病を免がれ、鼻加答兒その他の鼻や咽頭

の病を免がれることゝ信じます。

以上は僴々妙な說教になりましたが、これで以て我我の御先祖は、既に神代の時分より身體並びに精神の清潔を如何に貴んかゞ分かるであらうと思ひます。何れの國に於きましても、宗教上清淨を貴ばない事はありませんが、特に我國の如きは世界に冠たるものであります。又宗教も色々と變遷推移して參る中には、餘り精神上の修養にばかり偏倚つて、身體の健康、清潔と云ふことは等閑に附せられ、或は却て身體の不潔を自慢するやうな傾を生ずることがあります、これは、佛教の中にも、基督教の中にも、儒教の中にさへも多少左樣な傾向を生じた事があるのであります。然るに我國には、此等の宗教而かもその各分派までも殆ど這入つて來たのでありますけれども、頭髮、皮膚、爪などを茫々として、その不潔を自慢するやうな風儀は、何れの時代にも貴ばれない、決して流行らないのであります。單に宗教ばかりでない、醫術の上に於ても、西洋、支那あたりでは、愚にもつかぬ迷信から、隨分汚穢ない物を藥として用ひ、又は不潔極まるまねをしたものであります。尤も病氣に罹つた時は、生命には換へられませんから、如何なる不潔物でも、それが效能があると云はるれば、塗布もし飮みもしませうが、健康の爲だと云ふて、現に毎日尿を飮む國もあると云ふではありませんか。我國の人には、何程無教育の人でも、尿を飮むなどは想像も出來ぬことであります。三千年の古より二三百年前に至るまでの個人衛生、殊にその清潔と云ふ點については、我國と西洋諸國とは殆ど比較にならぬ、確に我々の誇りである、所が、僅かこの二三世紀の間に、歐羅巴の文明は非常な勢で進歩をし、その學術技藝實に驚くばかりの發達を致しまして、今日では悲しいかな、我國の方は萬事につけて劣りを取る有樣で、醫學の如きも西洋の方は遙に進歩して居る、從つて衛生上の思想も我國に比しては餘程よく普及されて居り、その設備もなか〳〵行屆て居つて、今度は我國の方が較べ

ものにならぬ程遲れて來た、殘念だが事實であります。

これは何の爲かと申しますと、第一に學術の研究が遲れたのであります、それで我々は一心不亂になつて、武勇、忠君愛國と云ふ點に於て世界に冠たるが如く、學藝に於ても世界を凌駕するに至らむことを期して居ります、それで醫學の如きは隆々として進步し、今日では殆ど西洋の醫學に肩を竝ぶるに至りました、實に盛な譯であります、從つて衞生思想も漸次普及されて、祖先傳來の淸潔好を、衞生學上の新智識に依つて實際に施すやうにならなければなるまいと思ひます。これは日に月に實現されて參りますが、これに反して人情は段々に不潔になつて來ると云ふやうな評判もあります、これでは、又前に述べました、外國では精神を偏頗に重じて、身體の不潔を省みなかつたと云ふのと反對の惡現象であります。願はくは、我等の祖先の身心竝びに淸潔を貴んだ如く、道德上に於ても衞生上に於ても、身心淸淨、內外光潔ならむことを希望して止まぬのであります。

顏の道具

人間の顏は、その人間の表札でありますから、人間の身體の內で一番大切なものであります。男女の區別は勿論のこと、その人が貴人であるか、卑賤な人であるか、善人であるか、惡人であるかといふことは、一寸その人の顏を見れば、大抵間違のないところが、判るのであります。それからまたその、人の心の內が、顏でよく知れるものであります、立腹してゐるのか、喜んでゐるのか、悲しんでゐるのかが判ります、これ等は極めて普通のことであつて、誰でも出來ることでありますが、少し練習を積めば、顏で以てその人の過去のことから、現在の狀態加之ならず、これから後のその人の有樣を知ることが出來るのであります、これは普通人相といふものであ

りますが、顔の有樣を見て、それを判斷するのであります。又御婦人方になりますと、顔といふものは殊更大切なものでありまして、一生の浮沈は顔の有樣で定まるといつても良い位であります。二千年の昔、羅馬に生れたクレオパトラといふ女は、支那の楊貴妃、日本の小野小町と竝べて、世界の三美人と言傳へられてゐますが、このやうに世界に名を知られるのも、みな顔のためであるとすれば、人間に取つて顔がどの位大切なものであるかといふことは、申すまでもないことであります。

このやうに人間の運命を司配する程大切な顔は、一つのものではなくて、種々の道具を持つてゐて、その道具が、それ〲完全であつて位置が適當であれば、顔を美しくすることが出來るのであります、さてその道具と申せば、既に誰でも知つてゐる通り、眉毛、眼、鼻、口の四つが主なもので、その他額、髮際、頬、頤、顎骨の形狀、耳などは、第二位に立つものであります。今これ等の一つ二つについて簡單に述べることに致します。

眉毛のことは前號で一寸書いて置きましたから、これは略きまして、直に眼のことを申します。眼で不思議なことは隨分澤山ありますが、世間では『眼のさきにあるものが見えないのかい』と申して、人に小言を云ふことがあります、併し人間は誰でも、自分の眼のさきにあるものを少しも見ないで、知らずにゐるものであります。それは何かと申しますと、眼瞼の縁に植わつてる睫毛であります、睫毛は誰の眼にも必ずあるものであるのに、誰とて自分の睫毛を見たものはありません、これは抑〱不思議ではありませんか、眼の前に立派に在りながら、決して見えないのであります、その理由は何でもないことで、今壁から一間許の所にランプを置いて、その間に鉛筆を差し出したとしますと、その鉛筆を壁の方に近づけるに從つて、鉛筆の影は鮮明に成つて來て、ランプの方に近づけるに從つて、薄く成り、極くランプに近づけたときは、モー鉛筆の影は壁に映らなく

なります、頂度これと同じことで、極く眼の近くにあるものは、眼の内に光線を送ることが出來ないものであるから、決して見えないのであります。

眼は頂度寫眞器のカメラと同じことであつて、一つのレンヅを通つた光線が、網膜といふ神經の種板に作用するのでありますから、この網膜に映つた影は、必ず轉倒してゐるのであります、併し人間といふものは、誰でも外界の物體を見て、皆轉倒してゐると思ふものでないのであります、寫眞器では、必ず轉倒した像を映すものでありますから、眼には一種不思議な作用があつて、轉倒に映つた影を、眞立の影として腦髓に傳へるのであらうと思われます、これは理學上で申す、光線の投射作用と云つて、一度眼の内に這入つてきた光線が、元の路を通つて、元の發光體の位置に歸へつて行くから、光線の位置は、矢張發光體の位置と同じ所に在るやうになるのであります、眼の產物で涙と云ふ水がありますが、その味は少し鹹いと云ふだけで、頂度水の様に透明であります、これは悲しくて泣いたときと、可笑しくつて哄笑したときと、眠くて、欠伸をしたときとに出るものであります、一番澤山出るのは、小兒の泣くときであつて、悲くなくとも、あまへつたれて泣くときにも出るものであります、そうして見れば、只泣くといふことだけで涙が出ることができのであるといふことが判ります、なぜ泣けば涙が出るのかそんなものは出なくとも、泣けないことはないと思われますが、却々そうはゆかぬもので、涙を出さずに泣いた人はありません、却て涙が出てゐれば、泣かないでも泣いたやうに思われるものでありますから、必要に應じては、茶杯の水を眼につけて、泣いたやうな風を構ふ人さへあるのであります、女子では涙が唯一の武器だと申します、とにかく涙といふものは精神に何か變化が起つたときに、出るものであるといふことは明であります、それ以上の意味は目下不明であります、併し精神に變化はなくとも、眼の内に垢が這入ると、非常に澤山の涙が出る

ものであります、これは單純の反射作用と申すものでありまして、其垢を洗ひ流す役目をするのであります、これも眼の不思議と申してもよいことであります。

眼は只物を見るばかりが、その本職であると思ふと大變な過であります。物事を考へるときに、眼を閉ぢると良い考が出るといふことは、誰でも云ふことでありますが、これは實際のことで、眼を開けてゐれば、種々のものが見えて、注意がその方に導かれるものですから、或一物に注意を集めて、深く考るといふことは、出來なくなるのであります、盲人が種々のこと、殊に音樂などに堪能であるのは、この注意力の集注といふことが完全に行われる爲であります、それ故眼は注意が遁出す門であるといふべきであります、また、人間が始終眞直に立つてゐるといふことは、眼の作用がなくては出來ないことであります、然しその作用は、只立つてゐて眼を閉じただけでは、一向判るものではありませんが、身體を動してゐるときに、急に眼を閉ぢると、身體の平均は全く取れなくなつて了います、眼を閉ぢて歩行いて見ると、眞直には歩行けない、右に倚つたり左に倚つたりするものであります、また顏を洗ふときに、立つてゐると、必ず倒れそうになるものであります、併し眼を開けてゐて、顏を洗ふ眞似をしたとても、身體の平均は崩れるものではありません、それ等のことを考へて見れば、身體の平均といふものは、眼と關係を持つてゐるものであることが判ります。

鼻は顏の中央に在るもので、平素は別に眼に付かないものですけれども、若しこれが無かつたら、大變可笑しな顏になつて了ふものであります、人間の容貌といふ方から云へば、一番大切な道具であります、日本人と歐洲人とは、どうしても顏が違つてゐるものであります、これは皮膚や眼の色も關係するものでありますけれども、鼻の高低といふことは、一番大切なことであります、歐洲人に云わせれば、日本

人の顔は平坦であると申しますが、これは鼻が低いからであります、鼻の形は種々の人種によつて違つてゐるものでありますが、日本人の鼻は、鼻の尖端が上にあがつてゐるか、または上つてゐず下つてもゐないのであります、併し欧洲人の鼻では、鼻の尖端が少し下つてゐるので、鼻の根から尖端までが、大變長く見えます、これも鼻を高く見せる原因であります、日本人の鼻では、根本から尖端までが、短いから正面から見ると鼻が大變低く見えるのであります、これは鼻の尖端が上に向いてゐるためであります、鼻の入口の所には澤山毛が生へてゐます、しかもその毛は仲々丈夫な毛でありますが、これは肺臓の内に這入つて行く空氣を濾過ためであります、人間の身體には五つの主な孔があるものですが、その五つの内で、鼻の孔二つといふものは、他のものと違つたところがあります、一體孔の内は皆粘膜といふ濕つぽい薄い膜で被われてゐるものですけれども、鼻の入口には粘膜はなく、通常の皮膚で被われてゐるのであります、それだから太い毛が生へるのであります、併し少し奥の方に這入つて行くとこれが粘膜に連つてゐるのであります。泣くときに鼻から汁が出るものでありますが、まさか鼻から涙が出るといふこともありますまい、これは眼から出た涙が細い鼻涙管といふ管を通つて鼻の内に流れてくるためであります。物の香臭を嗅ぎ分けることは、鼻の本職でありますが、これは嗅神經の作用でありますから。別段不思議なことはありません。眼といひ、口といひ、眉毛といひ、皆動くことが出來ますけれども、鼻だけは決して動くことは出來ません、尤も鼻翼と云つて、下の膨らみの所だけは、人によつて動かすことのできるものもありますけれども、眼や口の動くのと比べて見れば、極く僅で全く動かないと云つても良い位であります、それ故鼻の形といふものは、人相の上に必要なもので、鼻を隠すと、一寸人の見分がつき難いものであります、併し此頃のやうに隆鼻術などを行つて、鼻の形を化へて了ふと、

從つて人相も化つてくる譯であります。あまり長くなりますから、今回はこれで終りまして、次號には口と耳と頸のことを申上げます。

クサメとアクビ

人が尋常に呼吸を營むで居る、言換へれば、規則正しく生理的に、自然に呼吸の行はれて居ります時には、その運動は頗る穏やかなるもので、殆ど氣が付かぬほどであります。然るにこの呼吸運動には、種種の原因に由て種々の變化が起ります。單に呼吸器そのものに故障を生じた時のみならず、呼吸に關係して居る所の頸、胸及び腹の筋肉、横隔膜の病氣、これ等の運動を司どつて居る腦、殊に延髓に變化があれば、從て呼吸に變化が起るのであります。それですから肋骨を打つたり、腹部に小さな腫瘍か一つ出來ても、呼吸するに困難を覺ゆることがありまするし、鼻、咽頭、氣管、氣管枝、肺等の呼吸器そのものに病氣が起れば無論呼吸に障碍が起ります、それのみならず、腦充血又は腦貧血と云ふやうな氣味がありて、延髓の刺戟が起れば、何時でも呼吸に變化を及ぼして、或は深く或は淺く、或は疾速く或は緩徐く、又強くもなり弱くもなり、不規則になつて參ります。特に呼吸器の痲痺に依つて、將に氣息を引取らむとする際の呼吸などは、餘程奇異なものであります。

然し今茲にお話を致さうと存じましたのは、これら病機に由て起る所の變化ではなく、未だ病氣とまではならぬ前に油斷をすれば、病氣にも成りかねまいぞと注意する所の一種警報的の呼吸に就てゞあります。

先づ呼吸第一の關門は鼻でありますが、鼻は單に呼吸器と云ふばかりでなく、も一つ嗅器と云ふ役目を持つて居ります。それで嗅覺は鼻腔の中に備はつて居りますが、この嗅覺が又呼吸に取つて重要なる保護作用をすることになつて居ります、と云ふのは、

鼻は空氣の寒冷、乾燥、その他塵埃、黴菌等に對して防禦を致しますが、又瓦斯狀になつて居る不潔有害の物は、この嗅覺と云ふ番人に依て見張を致して居るのであります。

然るに一般にこの嗅覺の目的は、餘り能く認められて居らぬ、從て嗅覺の練習は等閑に附せられて居ります。それで今日では、多數の人は嗅覺の低能者で、殆どこれが無用の官能となつて居りまして、獨り貴婦人の御用を勤める位のことであります。然し嗅覺は決して、只香水や香油の好い匂を嗅ぐだけが能ではありません、これに依てこの食物は健康上食しても善いかどうか、斯の如き空氣中に居つても善いかどうかと云ふことを鑑定する大事な目的を持つて居るのであります。

この臭を嗅ぐのは、鼻腔の上部でありまして、此處には所謂嗅神經の細い枝が、無數にその粘膜に分布されて居ります。それから下の方卽ち鼻の孔に近い部分には、第五の腦神經卽ち知覺神經が來て居りまして、物が觸れます時には、頗る鋭敏に、その鋭いものであるとか鈍いものであるとか云ふやうなことが分かる、然し臭を嗅ぐ働はないのであります。若しこの部分に寒い風でも、塵埃でも、凡て稍や强い刺戟があります時には、卽ち一種痙攣樣の不規則な吸氣を致しまして、暫時息を停めた後に、非常に强い急劇な呼氣を鼻から出すやうになります、これが所謂クサメと云ふ運動でありまして、時には二ツも三ツも連發することがあり、人に依ては周邊かまはず、殊更非常な音を以てクショッとかアクショッとかいふのであります。これはつまり、鼻腔に侵入した所の有害刺戟性のものを排除する反射的の運動でありまして、外出前に一ッ出れば善いことがあるとか、二ッ出れば恥をかくとか云ふことは、皆樣の御研究に任かせます。況や彼の提灯を吹出すなどゝ云ふ藝當は頗る見事なものでありますが、敢て説明にも及ぶまいと存じます。

次にもう一つ奥に參りまして、これと同樣の異常運

動が起ることがあります。即ち物にムセルと云ふことであります。咽喉腔の處で、食道に通る咽頭と、氣管に通る喉頭と、二つの入口が別れて居りますが、物を呑み込みまする時には、喉頭が上の方に上つて參りまして、舌の根本の處に壓し著き、會厭と申して喉頭の入口の處に附いて居る辦が後の方に倒れて蓋のやうに成つて、此上を食物が越へて食道の方に這入つ行くのであります、尤も此會厭と云ふものは無くても、直ぐ其下に有る假聲帶と云ふものが左右から喉頭を閉て、容易に物を氣管の方に通しません、且つ液體を呑み込む時には、丁度河の水が、橋柱に當つて通るやうに、會厭の兩側を流れて食道に這入るやうに成つて居りまするが、それでも何うか致しますと、飲食物が過つて氣管の方に這入らうとすることがあります、殊に急いでお茶漬をサラ〳〵とやります時などは屢々あるのは、どなたも御經驗のあることゝ存じます。即ち、呑み込まんとする時に、忽ち咳嗽が出て非常な勢ひで、御飯やお茶が飛びだしましてお膳や甚だしきはお向ふの方にまで撒き散らされる事があります、此時側に居る人が、これを見て笑しさに堪へずして噴だすのは、これは噴飯の至りと云ふので、まだ喉頭迄も至らぬ中に口の中から直ちに噴き出されるので、ムセルのとは稍々別物であります。

此のムセルと云ふ運動は非常に大切な事でありまして、これに依つて喉頭の中に這入りかけた異物が外に撥きだされて、氣管の方に行くのを防ぐのであります、若しこれが氣管の方に參りましても、其の慣れない刺戟のために、劇しい咳嗽が起つて大概の物は撥き出してしまひます、尚この氣道には毛が生えて居りまして、上から物が這入つて參りますと、この毛でもつて逆に撥ね返す働きを致すものであります、かやうに嚴重に異物防御の用意が備つて居るのも尤もな譯でありまして、若し食物などが、氣管に這入つて出なかつたならば、非常に劇しい呼吸困難を起しまして、醫者の手でなければ如何とも致し難

いやうなことになり、それでも場合に由つては、これが爲に死ぬと云ふやうなことに立ち到ります、又これが氣管枝の細い處にいつて止まる時には、そこに炎症を起し、膿瘍を起し、若し又液體が肺胞迄も到ります時には、所謂、嚥下性肺炎と云ふ怖しい病氣を起すことに成るのであります、これを以つて見ますればムセルと云ふ事の如何に大事なことであるかゞ御解りにならうと存じます。噴出すのも決して笑ひ事ではありません。

扨てそろ／＼アクビが出る程長くなりましたが、このアクビと云ふのは抑も何事ぞと申しますと、不隨意的に起る所の異常の呼吸運動でありまして、廣く口を開いて、長く深く、稍ゝ高聲の雜音を伴ふ所の吸氣と、これに、次で、短くして、矢張一種の雜音を伴ふ所の呼氣より成るのであります。頗る悠長な運動であります、が、又これが痙攣性を帶ぶることがあります。乃ち腦貧血などに因て、顏が蒼くなつて、冷汗を出して、いやにアクビをするやうなことがあります。これは血液の缺乏或は腦、脊髓に循る血液の酸素に缺乏して居る爲に起る所の現象であります。

同一の理由に依りまして、不良の空氣中に居るとか、或は肺に於て、血液の中に十分酸素を送り込む程に深く呼吸しないと云ふやうな場合には、恰も十分に呼吸をせよと、自然に勸告する如くにアクビが出るのであります。それですから坐りこむでばかり居りますと、別に疲れもしないのに、兎角アクビが出る、これに反して散歩でもして居れば、卽ち深く呼吸をします時には、かなり疲勞してもアクビは出ないのであります。彼の人の群集して、空氣が惡くなつて、而かも風通しの惡い寄席、芝居、宴會乃至演說、講話會又敎場などに於きまして、往々恐ろしくアクビの出るのも、全く同一の理由に依るのでありまして、藝の下手なことや、演說、說敎の詰らぬことや、先生の講義の面白くないと云ふことがアクビの直接原因ではありません、然し斯樣な面白くない話を長

長さ聴かされて居眠を催すやうな場合には、既に其室の空氣も惡くなつて居りまするし、それに一體話が面白くなつて、泛然他の事を考へて居るやうな時には、呼吸も自然淺いものであり、此等の原因が綜合して遂に大アクビとなつて現はれるのであります、斯樣な譯からしてアクビは退屈の標と見做されるのであります。かういふ場合には又よくアクビが傳染ると申しますが、これはつまり其處に居合せた人々が、みな同一の有害作用を蒙つて居るからでありまして、卽ち變惡した空氣の中に居つて、酸素に乏しく、炭酸が多くなつた血液が、同樣に脊髓を循つて、その刺戟に由てアクビが出て來るのであります、從てそのアクビの出る時刻も略ぼ同樣でありますから、一時に此方の隅でも彼方の隅でもアクビの連發が始まつて、遂にこのアクビ傳染說が起つたものと思はれますが、一方には又人がアクビをするのを見ますと、多少それを自然に模倣する氣味のあるものであります。同時にアクビをすれば三日兄弟であるとは、餘程面白い言葉であると思ひます。兎に角アクビの出ますのは、深く長く完全に呼吸をして、又新鮮なる空氣中に出で適度に運動して、能く血液の循環するやうにせよと云ふ自然の要求であると心得なければなりません。然れば假令これを讀でアクビが出たとしても、そは此の話の詰らぬが爲にあらずして、その人の居らるゝ室の換氣法が惡いか乃至その方の呼吸法が宜しくないものと考へなければなりません、宜しく窓を開け放して仕事をし、或は外に買物にでも出掛くべきであらうと思ひます。

鼻の話（承前）

口腔呼吸は呼吸器病の原因をなす

此れは前も申しました通り、鼻腔の複雜なる構造は、吸入する空氣が、喉頭、氣管等を保護する樣に出來て居りますが、口は其の設備が有りません、其故口より入る空氣は澤山の塵芥、黴菌を有し、鼻を通れ

る空氣の如く濕めらるゝ事なく、又濕氣も少いのであります、かゝる空氣が直接に喉頭に侵入するのでありますから、其不純物は其の部に粘膜を害し、黴菌は其所に附著して蕃殖し冷き空氣は粘膜を刺戟し、乾きたる空氣は粘膜を乾燥にして、不快の感を起さしむる等、種々有害なる影響を起します、でありますから、口より呼吸する人は喉頭カタール、氣管支カタール等に罹り易く、其他肺の種々の病を起し易いのであります。

口腔呼吸は口內の諸病を起す

健康なる人の口は常に閉ぢてありまして、唾液によりて濕されて居りますが、外界の冷き乾燥せる空氣が常に此所を通過して居る時は、舌、歯齦及口腔の奥の方の部分も乾燥致しまして、從つて口內は傷害を受けて、炎症を起し又は扁桃腺肥大症の原因となります。

口腔呼吸は顔面の疲勞を覺えしむ

鼻より呼吸して居る間は下顎を動かす筋肉は靜止し休息して居ります、其結果として上顎は上顎に密接し、口を閉ぢて居るのであります、所で口を開いて居る爲めには一定の筋肉を働かしておく事が必用なのであります、でありますから、口より呼吸する時は自然頬の所にある筋肉は甚しく疲勞するのでありまして、遂には疼痛をさへ覺ゆるに至ります。

口腔呼吸は睡眠を害す

睡眠中は吾々の精神は休息して居りますから、知らず〳〵に開きたる口を閉ぢやうと致します、口を閉づる時は呼吸が出來なくなるものでありますから、精神不安となり、恐しき或は悲しき夢を見、或は突然醒起し、或は高き叫聲を起し、睡眠不足となり熟睡する事が出來なくなります、然る時は日中の疲勞は恢復さるゝ事なく、頭重く、眼暗く、終日怏々として暮す事となります。

殊に乳兒或は幼少なる小兒にありましては、斯樣にして起る睡眠障碍は殊に著しいものでありまして、睡れるかと思へば苦しき夢よりさめたるものゝ如

く、突然叫びをあげ或は苦悶を示し、殊に不憫のものであります、そして小兒の睡眠時間は殊に長くなければならぬのでありますから、其睡眠障碍は殊に甚しく其健康を害する基となるのであります。

口腔呼吸は顔面の變形を來す

口を開いて居る爲めに咀嚼筋は引き伸ばされ顔は長くなり、顔面筋は一般に弛緩して緊張を失ひ、痴呆狀を呈します、そして一方には精神發育が妨げられますからして、益々其の容貌は痴愚の相を表はすのであります、口中にも種々の異形を呈しますが殊に著しいのは、門齒殊に中央の二枚の門齒が、前方に向ふのが固有であります、專門家は斯様な顔貌をアデノイド形と申しまして、アディノイド增殖症といふ病氣に固有の症狀とされて居ります、アデノイド增殖症に就ては後に詳しくお話致します。

口腔呼吸は消化をも害す

口より呼吸した結果、口内炎、咽頭カタール等を起すは前に申しました通りでありますが、其の爲めに口内に生じた不潔なる病的產物は、知らず〳〵の中に嚥み下されまして、胃に達し胃の消化を害し、腸胃カタールの原因となります、又齲齒を生ずる事も消化不良の原をなす事はいふ迄もありません。

口腔呼吸は身體の發育を妨ぐ

口より呼吸する人は、其の顔面が變形する外に、猶鼻の中隔にも異狀を呈するものがあります、又胸部にも種々の變形を來します、此れは呼吸が不完全な爲めと一は呼吸器の抵抗弱く、疾患し易きことによるものでありまして、幼少の時より口で呼吸する人の胸は狹く、薄く長くなつて居ります、又水おちの所は著しく凹陷して居りまして、所謂鳩胸を起します。

口腔呼吸は種々の神經症狀を起す

前にも申しました通り鼻呼吸の妨げらるゝ時は、神思不快となり頭痛を生じ甚しきは眩暈の感を起します、此頭痛は呼吸不充分の爲め、身體を循環する血液の酸素を含有する事少きためにもより、又顔面の諸筋肉の疲勞にもよります、此頭痛は更に頸よ

り上の充血を起して鼻の閉塞を益々強むる原因ごもなります。

鼻の閉塞は頭痛のみならず、記憶力を害し、興奮し易く感情的の人となり、著明なる神經衰弱の徵候を發します、小兒にては殊に知的發育不完全となり遲鈍にして周圍に對する注意力缺乏し、學校の成績は劣等となり計算力理解力殊に甚しく障碍せられます、其外鼻呼吸の妨げらるゝ時に夜尿症を發し喘息を起し又は癲癇性發作を起す例もあります。

以上は鼻の塞がれる爲めに來る障碍の總てゞはありません唯其主なるものばかりであります、而かも鼻の病氣は鼻呼吸を妨げるばかりでなく其他種々の厭はしき症狀を起すのでありますから、鼻の病はなか〳〵忽せにすべきものではありません。

鼻の閉塞は音聲を變ず

鼻があき過ぎる時は所謂鼻にかゝる聲を發しますが、鼻がつまる時も亦一種の音聲異常を生じます事は人は誰しも一度は御經驗なされた事で御座いませう、風邪の時に於ける所謂鼻聲と申しますは最も好い例であります、其の聲は頗る嫌ふべき厭ふ可き、不愉快な聲であります故に聲を以て世渡りする人には之れを殊に注意する必用があります。

鼻がつまる時は何事にも不成績なり

鼻がつまつて居る間は、何事をなすにも不愉快であるから從つて、其の結果は多く不良であります、勉強も思ふまゝには出來ませんから、試驗前などには此の鼻のつまる事を恐る可き大敵であります、其外の仕事をしても直ぐ嫌厭の情を生じ、微細な仕事などは出來なくなります、遊戲すらも面白からず、勝負事は何によらず常には好める事も多く失敗勝ちとなり、碁にあれ將棋にあれ或は「かるた」の如き、何れも常には勝つ人にも容易に負けるものであります。

力業も思ふ様にならぬもので、相撲なども鼻がつまつて居る時は負けるものであります、岡田博士はよく大砲、玉椿等が鼻茸を手術した後に、著しく強く

なつたといふ事を御話なされますが、此れは眞實の事であります、諸姉も風邪の時に御經驗になつて居らるゝ事だろうと存じます。

（以下次號）

美容法（承前）

前段には、毛髪養生法の第一として、髪の洗方、洗髪料、それから、髪につける香水、香油、又癖直しの事などに就て申上ましたから、今日は順序として、毛髪の養生法に缺くべからざる第二の方法をお話致します。

前に申述べました所の洗髪法と同樣に、規則正しく實行すべき毛髪の養生法は、頭のマッサージであります。これは如何致すかと申しますに、男子なれば、毎朝頭を洗ふ前に歯の密な櫛を用ひ、それからブラッシで以て強く刷けば宜敷いのですが、婦人方では、歯の廣い櫛を用ひまして只髪を梳くばかりでなく、能く髪の根本の處まで順付ける樣にして、頭の皮膚の上を滑べらすのであります。

これは毎日行ふても差支ないのですが、この外に毎週一回づゝ髪の毛を扱くやうにすることが必要であります。それは如何するかと申しますと、先づ兩手の指を熊手の樣に擴げまして、それで以て髪の毛を掻き捌きまして、それから髪の根より一二寸上の處を其處此處と掴みまして、程善く宅るやうな具合に牽張るのであります。次に髪を一纏めにして、右の手で以て、その先の方を一束に握り、額の上に對し右左の前腕を越して、それから、この左の腕を枕にして即ち槓杆にして、頭の皮膚が全體平等に引延ばされるやうに前下方に牽張るのであります。第三には、兩手の指を櫛のやうに鎖ねて、髪を梳きまして、そのもつれた惡い毛を梳き取つてしまふのであります。これは是非必要な方法でありまして、度々行ふが善いのです。全く行はぬよりは、多少でも效があります。

尙ほ一つ申し添へなければならぬことは、髪に用ゆ

る櫛や刷毛は常に清潔にして置くことであります。櫛は縦令唯自分だけに用ひて、人には決して使はせぬとしましても時々これを掃除するやうに致したいものであります。これは譯のないことで櫛を使ひました後で、稍々強い石鹸溶液の中に入れて、楊子で洗て乾かせばよいのであります。男子は床屋に參りまして、そのブラッシや櫛から種々の病氣を移されて、禿頭病、又は彼の恐るべき丹毒などに罹ることさへもあるのは屢々見る所であります。婦人は幸に床屋に行て理髪することはありませんけれども、彼の所謂髪結女の持て來る櫛は隨分恐るべきものであります、これは必ず自分の櫛を用ゆるやうにしなければなりません。これで以て髪に必要な一通の養生法を述べ終りましたから、次には二三の髪の病氣に就てお話致す積であります。

（以下次號）

育兒

疫痢の話

五月雨の降り續く頃から夏にかけて、哺乳兒から滿二歳位迄の小兒の生命を奪ふ急性消化不良と云ふ恐ろしい病氣が少し下火になりかけた八月の末頃から秋の初めにあたつて一層性の惡い病が現れます、九州地方で疫痢、名古屋地方で早手又は颶風病と呼ぶ極めて急性の傳染病で、九州地方の人などは、醫師から疫痢と云ふ診斷を受けるのは、其子に死刑を宣告されたのと同じ様に感ずる位、極めて恐ろしい病です、一體この病は我邦以外には餘り耳にせぬ一種の病で、何時頃から起つたかといふに、今より百五六十年乃至二百年位の昔から流行したものらしい（延享年間又は正德年間）、而して前にも述べた通り、

最も古くから人に知られたのは九州地方で、漸時名古屋地方に蔓延したものと思はれる、然し此病は九州名古屋地方に限つたことはなく、千葉、福島、德島等の諸縣、其他播州地方などにも流行した事がある、東京はどうかと云ふに、他の關東地方と同じく疫痢は無いものゝ樣に思はれて居たが、明治三十二年頃からぼつ〳〵流行し、明治三十七年には多數の患者を出した、それから此病が流行する時分には丁度赤痢があるから、疫痢も一種の赤痢だと云ふ學者と、全く赤痢には關係のない病氣だといふ學者とあつて、まだ何方が正しいか判らぬ、この病に罹るのは三歳から六歳位迄の小兒が多く、哺乳兒や大人の冒されるのは稀である、又大人は感染ても輕い、小兒は之に反して半數位は命を奪られる、まづ此病はどんな風に起つて來るかといふに、餘り高くない熱(三十八度位)が起つて、一二回軟便の通じがあり、腹の少し痛い事もある、元氣が衰へて疲勞いのでごろ〳〵臥轉がつてゐると、親が心配して蒲團など展べてやる、然し大した事もあるまいと高を括つてゐる中に小兒は寢入つてしまふ、が、時々眼を覺す、こんな事が七八時間續くと、俄かに模樣が變つて、熱が四十度以上に昇り、頭がぼんやりして譫言を云ひ、痙攣が起つて恰で腦膜炎の樣な模樣になる、親はこの激變に驚いて、醫師の許へ馳けつける、醫師が來て脈を觸れて試ると速い絲の樣な脈が搏つてゐる、護謨の管から心太でも押し出す樣に、肛門からだら〳〵と粘液便が出て來る、こんな調子で半日か一日經過する間に、醫療の甲斐もなく斃れるのである。

この戰慄す可き病氣の經過はざつとこんなであるが、豫防法はどうしたら宜いかと云ふに、東京で疫痢と云ふて居るのは、大抵皆な一種の赤痢であるから、腹下しの患者があつたら注意して小兒を近づけぬが宜い、大人には何でもない輕い痢病でも、小兒に感染ると大變な事になる事がある、其外水殊に井戸水などを飲ましてはならぬ、又多くの場合には食

物の不攝生が原因になつて居る故喰過ぎぬ樣、食料の選擇に意を用ゐねばならぬ。

涙こそよそには見せね子故には
物を思はぬ日そなかりける
（神山魚貫）

小兒のねびえ

洪水の悲慘と合邦の歎叫とは、本年の夏を涼しく過ごさせて呉れた天來の薫風でありました、併し秋に入つてからは、洪水の結果として、惡疫の流行する兆があるやうな風說で、新紙などにも、洪水後の衞生について餘程注意をして居るやうであります、この際流行する惡疫と申せば、已に世に知られてゐる通り腸窒扶斯が第一番であつて、赤痢、虎列拉、單純の腸加答兒、大腸加答兒などであります、これ等の病氣は皆夫々恐るべきものでありますから、十分豫防法を守つて、その犧牲に成らぬやうに心掛けねばなりません、併し小兒といふものは、自分で病氣を豫防するといふことは出來ないものでありますから、その保護者たるべき人は、自分の身體よりも、ヨリ親切に小兒の身體に注意を拂はねばなりません。

前に申しました種々の病氣は、皆胃腸の病氣であつて、病毒は口から這入り、胃や腸を傷つけて、遂に生命を奪ふといふ經路を取るものでありますから、これ等の病氣を豫防するには、第一食物に氣を付けること勿論のことでありますが、その他に胃腸を弱らせないやうにすることが肝腎であります、胃腸の本來の作用は、少し位の黴菌が這入つて來ても、直にこれを殺して了ふ力があるものですから、この作用を弱らせないやうにしてゐれば、食物の注意はそんなに必要なものではありません。小兒は身體の發達が十分でありませんから、少しのことが直に身體に障つて、恐ろしい結果に成り至ることがあります

が、胃腸の作用もこれと同様に甚だ害せられ易いのであります、その原因となるもので一ばん多いのは、今ここにお話する寐冷であります、寐冷と申せば、字に書いてある通り、寐て冷へるのであつて、夜具の不注意から、眠つて居る間に、身體が強く冷されて、何か病氣を起すことを云ふのであります、身體を冷して害になることは、たれでも知つてゐることでありますけれども、冷したために何故害をするのであるかといふことはまだ解らないのであります、併し手足を冷すと、感覺が鈍くなり、色が青ざめてきて、遂には痲痹て自由に動かなくなつて了ふものでありますから、身體のどこでも、冷されるとこう云ふやうな害を蒙むるのだろふといふことが想像せられるのであります。

さて寐冷をして一番多く起る病氣は、感冒と、胃腸病とでありますが、ここでは胃腸病のことだけをお話することに致します。

寐冷をしたときに、腹部が冷されると、腹部にある種々の道具(胃、腸など)もまた冷されるのであつて、胃腸は冷たくなり、血液に乏しくなつて、青さめて來て、運動が十分でなくなります、そうすると胃腸から分泌せられる消化液といふ汁は、大變分量が少くなつて來て、食物を消化する力が弱くなり、また黴菌を殺す力も弱くなります、そうすれば食物の内にある惡い病毒や、黴菌などは、腹の中で増へて來て、窒扶斯菌なら窒扶斯を起し、赤痢菌なら赤痢を起すのであります。若し幸にして食物の、内に何も惡い病毒や黴菌がゐないときには、窒扶斯や赤痢などのやうな恐しい病氣は起しませんけれども、胃腸は食物を消化する力が弱くなつてゐるために、食べた物はそのままで、胃を通過し小腸に下り、大腸に進んで行くものでありますから、小腸や大腸はその食物のために刺戟を受けて、今まで規則正しく運動してゐた蠕動は、急に早くなつて、腸の中に在るものは早く追ひ出されて了ひます、これが下痢といふものであります、このやうに單純の下痢であれば、

左ほど危險はありませんけれども、これがい永く連いてゐる內に、惡い黴菌が這入つて來て、本當の恐しい病氣を起すやうになるものであります、また黴菌が這入らぬまでも、下痢が永く連くと身體は衰弱して來て、腸に創が出來て、大便に血が混つて出るやうに成ります、その創は小腸に出來たり、又は大腸に出來たり、定りはありません、若し小腸に出來たときは、容易には癒るものでありません、それが重症になると、腸に孔が明いて、腹膜炎といふ恐しい病氣を起して死んで了ふのであります、大腸に出來たのは大腸加答兒といふもので、頂度赤痢と同じ病であります。

唯の寢冷と思つてゐたのが、思ひもつかぬ重い病に變じて、小兒の生命を奪ふやうなことは、右に述べたことを考へて見ればあたりまへのことでありますから、秋口の夜に成つて冷へて來る季節には、小兒に寢冷をさせないやうに氣を付けねばなりません。

さて寢冷をさせないやうにするには、どうしたらよいかと申しますと、誰でも小兒の寢衣を溫暖にして、夜具を澤山にしてやればよいやうに思つてゐますけれども、必ずそうとは限りません、小兒の寢冷は夜具や寢衣が厚いときにも起るものであります、あまり溫暖にして寢かしますと、寢てゐる內に汗をかいて、身體は水で包まれたやうになり、その汗が冷へるときに身體が冷されて、寢冷を起すのであります、又小兒の寢るときに腹卷をさせる人がありますが、これは大變よいことであります、併し腹だけ卷いたのではあまり效能はありません。

然らばどう云ふ風にすれば小兒の寢冷を防ぐことが出來るかと申しますと。それは別段むつかしいことではありません、先づ小兒の胃腸を保護するために、腹と臀とを良く包むやうな股引の類を用ゐて、夜寢る前には食物や飲物を與へないやうし、夜具はあまり澤山にしないで、夜明方には一枚位增してやるやうにすれば、最も結構であります。若し寢冷をして下痢を起したときは、矢鱈な藥を用ゐるよりも、先

づ温粥か懐爐で以て腹を十分に溫めて、食物は軟いものばかりにして、一日位經過を見るのが良い、若し下痢が停らないで、段々ひどくなるやうであれば、勿論直に醫師の診斷を受けゐばなりません、賣藥などは決して用ゐることはなりません。

知るらめや子を思ふ闇の夜の鶴
わがよ更行く籠に鳴くこは
（源有長）

日曜

西洋では、宗敎上の關係から、日曜日と云ふものは、極めて大功な一日として、生活上餘程深い意味を有つてるのであります。我國に於きましても漸く、一週一日の休暇は頗る貴といものになりましたが、然しこの貴とい一日の利用法に就ては、餘り心を用ひられないやうに思はれます。

大人の日曜日に就ては、その人その職業に就て、各各利用し方もありませうから、これは又別に一の大問題として講究する價値があるのでありますが、十一二歲から十七八歲位までの童男童女の日曜日に就ては、宜敷その兩親が誘導し指圖をして、最も善く之れを利用さするやうにしなければなるまいと思ひます。

今日の所では、既に學童の課業は、幾ら氣をつけても、尙は重過ぎると云ふ傾を免れないのでありまして、その敎室の如きも學校衞生上より、出來得るだけの注意はして居りますけれども、なか〳〵完全と云ふ譯には參りません。特に都會に於ける學校兒童は、種々の危害の中に在て、その小さな腦を、それ相應に苦しめるのでありますから、健康な發育を遂げしむるには、家庭に於て更に一層の注意を要するのであります。

親としてその小兒の健康に常に注意すべきは申迄もないことでありますが、その各季の休暇は勿論、毎

週一回の日曜日と云ふものを小兒の健康に向つて、巧に利用するやうに致したいと思ふのであります。』

先づ男の兒であれば、ロンテニス、フツトボール、擊劍、柔道、ボート、夏は水泳、冬は氷滑と云ふやうな種々な運動や遊戲がありまして、適度に行へば各健康上に利益はありますが、兎角ある一方に偏り、又過度になり易いものであります。女の兒も、音樂、茶の湯、生花など〻種々樂しく一日を暮す稽古事もあり、殊に踊の如きは、體操の一種と見て頗る健康にも善からうと思ひますが、これまた決して男兒に劣らぬ弊害が伴ふて居ります。

それで雨の降る日などは、家の内に於て、物語をするとか、茶の湯、音樂、その他の遊技も結構ですけれども、これらは何も日曜日でなくても出來ることでありますから、天氣の好い日曜日には、必ず郊外に出て森や林の中に遊ぶことをお勸め致すのであります。私は兒童に取てこれ程健康な有益な日曜日の利用法はなからうと信ずるのであります。特に兩親、家庭教師或は兄樣とか姉樣とか稍〻年長の人が連れて行くならば、身體上にも精神上にもその效果は實に大なるものであらうと思ひます。

凡て人間が自然と親む程健康に善いことはないので、自然に遠ざかれば、如何しても病氣に近づくのであります。單に身體の健康のみならず、その精神も不自然になり、不健全になるのであります。都會の不潔なる空氣の中に、不自然なる事ばかり見聞して居る小兒は、到底健全なる身心の發育を遂げることは六ケ敷いのであります。

彼此と理窟を並べませんでも、何より證據、追々時候も好くなりましたから、忙しいとか、別に用があるとか云はずに、日曜日は斷然俗事を放棄して、少年少女を引率して辨當持參で郊外に出で御覽なさい。十二三歳の兒童は二三里歩いても平氣であります。陰氣な佛壇の花立にのみ見たる七草の自然に露を帶びておのがじゝ咲き亂れたる野逕を過ぎ、金魚屋の盥の中より錢を投じて買ひ得たる小魚の藻の中

に遊ぶ小川に沿ひ、女中の給仕に御飯の中の黄色に甘き栗の毬ながらに落ちこぼれたるを拾ひ、露物椀の中に豆腐と雜居したる短冊形の松茸の木の根に香高きを採り得たる時、二尺ともなき籠の牢獄に捕虜となつて只一色の餌に鳴き枯したる小禽共の嬉々として枝より枝に飛かふを見る時、兒童の智識は初めて眞に活きたるものとなるのである。

新鮮の空氣の中に、あざやかなる日光を浴びて、綠の野邊、紅葉の森をそゞろありきしつゝ、直接に天然自然の活大學に學んだ兒童の一日は、不潔の空氣中に不自然の敎育を受けた六日に勝ること百倍である。その持參辨當の不足を覺ゆるに見ても如何に健康に食氣の振ふかゞ分かる、單に消化器のみではない全身總て善良にされた血液が生々として活潑に循環するのであるから、六日の毒を一日で吐き盡して了ふのである。日曜だと云ふてお化粧に浮身をやつし、衣服の小言、穿物の不足を竝べて、外に出ても適々友人の所にてお鮓鮨よお菓子よと喰べるばかりに、一日を暮しますよりも、野外に出るのですから身なりも別に飾る必要はない、反てなるべく輕裝して、パンの一斤も携へて出掛ければ澤山である、而かもその效果は、市中の腐敗した空氣の中で、全力を盡して體操するよりも、滋養物の鯨喰するよりも遙に優つて居ります。家に歸たならば、溫浴をして其夜グッスリ睡眠しますならば、翌日は非常な元氣に滿ちて、愉快に學校に出掛けることが出來るのであります。これは二三回續けて日曜ごとに試みましたならば、その效果の偉大なることは、親も小兒も決して疑ふことの出來ない事實であることを證明するに相違ないと存じます。

生るより千代ふる松も天地の
めぐみをもれて榮えやはする
（小澤蘆庵）

家庭衛生

アルミニユームの什器

金屬の臺所道具は、一つは重いのと、一つは鉛や錫などの中毒を起すことがあるので、餘り便利なものでありません。それで近來は、金屬の中でも最も輕いアルミニユームで以て飲食器やその他種々のものを製りまして、ます〳〵もてはやされるやうになつて參りました。併しこれが健康に取つて如何かと云ふ問題が起ります、これを解釋する爲に、獨逸の衛生局で以て殆ど一ケ年もかゝつて精密な調査を致しました。

アルミニユームの飲食器は、輕るくて便利でありまするから旅行用として、水筒や水呑が盛に造くられまして、これに、水、茶、コヒー、葡萄酒、コンニヤツクなどを入れて持つて歩きますから、アルミニユームの水筒の樣な物にこれらの物を入れて、丁度歩く時に搖られるやうに、絶えず數日間ゆすぶつて試驗して見たのであります、ところが何れの場合に於きましても罎の內面、又其水の中にも極微細な顆粒狀の沈澱物を生じたのであります　これは恐らく陶土と、有機物質から出來た物でありませう。ところが、こゝに一つ注目すべき事は段々時が經つに從つてこの沈澱物が著しく減て來る事で有ります、これは何う云ふ譯かと申しますと、其の沈澱物が罎の壁に堅く附いて、同時に之が又溶解を防ぐ作用が有るからで有ります。

右の經驗に依りまして、他の錫の樣な物に於きましても同樣で有りますが、この不溶解性の被覆物の保護作用を損しないために、これらの道具を研いではならぬと云ふ事が分つたのであります、この考へからしてアルミニユームに就て精しく檢査をするために、次の樣な試驗を行つて見たのであります、卽ちアルミニユームで造つた新しい器を、牛酪酸で以て

三十分間程煮たのであります、而う致しますと、それから十二ミリグラムのアルミニユームが溶けました、ところが前に一度水で三十分間程煮た器でありますと、同じ試驗をしましても十分の一しか溶けないのであります、然るに砂で以て此の器をよく研いたあとで、即ち保護的沈著物が磨り去られた後で同じ試驗をやつて見ますと、矢張初と同じ様に澤山の金屬が溶け出るのであります。

この關係は、その器に長い間、葡萄酒の様な冷めたいものを入れて置く時でも同じ譯であります、それでありますからアルミニユーム器を永く保せやうとしますならば、理に適つた取り扱をすることが必要であります。他の勝手道具は、溫かいソーダ水や、薄い灰水で洗ふのは適當して居りますけれども、アルミニユーム器は、これらの洗ひ方をしてはいけません、それから砂や磨砂で磨く洗ひ方もこの金屬は軟かいので應用することは出來ません。

兎に角アルミニユームの成分は、液體に溶解されると云ふ事は證明されましたが、これが果して飲食に際して有害であるかどうかと云ふ事は、これを確定する爲に、左の如き試驗をいたしました、それは五六疋の犬に毎日段々アルミニユームの量を增して食物に混せて與へて見たのであります、ところが其結果は、只僅に消化障碍を起したに過ぎませんでした、尙二名の醫者が正しくアルミニユームの一定量を呑み續けて見ましたが、其結果は矢張り前の犬と同樣でありまして、而も其量は、使用器具から溶けでるよりも遙に大量で有つたのであります。

右の事實から致しまして、通常吾々が飲食物と共に呑み込むアルミニユームの量と云ふ物は、健康上には決して何等の有害作用を及ぼすものでないと云ふ事が分るのであります。

病原としての不潔物（承前）

腸詰の中には、時とすると不潔な物がませつて居て、

中毒を起すことがあります。夏は、新らしい肉でも腐敗すること速かなれば、腸詰の如きものを食べる際には、注意をしなければなりませぬ。肉の悪いのを喰べて、病氣を、惹き起した時は、高い熱が出る、下痢が來る、劇しい場合は遂に死んでしまひます。

右のやうな關係は、何れの榮養品に於ても觀ることが出來るが、殊に野菜の類をば、煮ずに食べる場合に、黴菌、寄生蟲の如きものが、胃腸に運ばれて、遂に病氣の原因となることがある。

その外また、食事に臨み、洗手の勞を省きしため、手に附いて來た鉛が、食物に混じて胃腸に入り、害を招くことあり。植字者や陶匠の如きものが、鉛の中毒を被るのは、二のためです。

匙、箸、茶碗類、盃等が、病原となるものを附著せしめ得ることは素より明なことである。宴會の場所などで、一つの盃が、彼方や此方に廻されて、人から、人に、手から、手にさては、口から口に移り行き、若し病原物でも在つた場合は、病原物の分配をして、病氣を製造するやうなものです。盃の交換などは、文明人のすべきことでない、氣が附いて居りながら、敢て廢せないものは、實に思はざるの甚だしきものである、盃洗の如きものが、何の役にたちませう。

小兒は、何にも知らず、不潔なものを含んで居るものを嘗めたりなんどして、それから、病氣を惹き起すことがあります。

斯かることは、是非ともお母さんたる人が、注意をせねばなりませぬ。罎の栓であらうが、護謨製の乳首であらうが、いやしくも、不潔になつて居るものは、決してもたせてはなりませぬ、注意によつて小兒の疾病を豫防する場合は、澤山にあります。健康の小兒を持てる母は、親の誇りとすべきことです。

甚だしいのは、母の口から、子の口へ直接に病氣を輸入する場合がある、謹しまねばなりませぬ。

口の話の序でに、齒の保護を一寸申上げませう、吾

吾が歯を常にみがかざれば、歯と歯の間に、歯石の溜ることは、誰でも知つて居ることでせう、この歯石が、口中の黴毒によつて分解し、さては、歯の質が破れて、腔洞が出來ます、この腔隙から、化膿菌のやうなものが進入して、歯莖の炎症を起して、大に困らねばならぬことがある。

歯の悪い人は、いくら硬いものがすきでも、斷念せねばなりませぬ。勿論噛むことが出來ないからです、歯の仕事は、食餌をよく咀嚼して、胃の方へ送ることです、けれども、歯に障碍が出來て、自己の任務が十分盡されないことゝなると、勢ひ胃の方で歯の職分をまでお手傳ひ、否な引請けねばならぬことゝなり、一度や、二度なら兎に角、毎度のことゝなると胃だつてたまりませぬ、その影響は、又腸にも及びて、さては、胃腸共に害せられることゝなる。

斯く論じ來れば、歯を清潔に保つは、全たく健康を保つと云ふことにもなります。歯磨や、楊枝の選定は、第二の問題と見てよろしい。

それから、まだ申上ねばならぬことがあります。それは、外でもない、家畜が病原を媒介することであります。家畜と云へば先づ犬や、猫のやうなものが重でせう。

試驗によると、犬や猫の毛には、チーフス菌が七日も生活して居り、ヂフテリー菌が二十四日も生きて居ることが出來ると申します、犬や猫を自分の膝にのせて嬉んで居る方はまだしも、婦人方で、猫や犬の顔をおなめになる方があります。愛護の上からはさることながら、清潔、養生の上から斷じて廢さねばなりませぬ。

由來日本人は、清潔を樂しむ國民で、よく例に出されるやうでありますが、これに反して不潔の例には、支那人が出されるやうです。

精神の清廉を要する如く、身體、衣服、食物の清潔も必要です。斯くの如くにして、内外清からば、人間は實に貴といものと申せませう。

そは兎も角も、以上、病原としての不潔物につきて、

大略を述べましたが、一々例を引いて委しく述べることは廢しませう、併し清潔を守るために、疾病を豫防し得ること多きは、私が繰返して申述べて置きたい所であります。

（完結）

日常生活の衛生（承前）

前に勞働と休息とを交換すべきことを申しましたが、仕事を變ると云ふこともまた極めて必要のことであります。身體的の勞働をする者に於きましても、朝から晩まで同じ仕事を一つ調子に行はねばならぬと云ふことになりまするど、何程容易な仕事でも倦んで疲勞し易い、卽ちこれは絕えず同一の筋肉ばかりを使ふからであります。それ故にその仕事を變へて、一定の筋肉が働いて居る時には他の筋肉が休み得るやうにすれば、大に樂で且つ仕事も有力に出來る譯であります。これは精神的の仕事に於ても同樣でありまして、一定の時間或仕事をしたならば、次には別な方面に考を向けることが必要であります。これは腦の疲勞を恢復する效力があるものであります。一體人と云ふものは全く何も考へないと云ふことは六ケ敷いものでありますから、徒に茫然して何もせずに休んで居るよりも、時々その思想の範圍を變へた方が、寧ろ腦の疲勞を恢復するに效があるものであります。例へば二時間數學を勉强したならば次の一時間は音樂を學び、その後で裁縫して、終つたならば手紙を書くと云ふやうにするのであります。これは一日の中のことでありますが、毎日一定の課業ある人に取ては、一週一度の日曜にその業を休むと云ふことは、決して損にならないのみならず、此日には全く日常の業務について頭を使はず、別に人間の品性を高むべき高尙の事に務め、或は郊外に遊ぶと云ふことは、どの位身心に有益であるか知れません。

併し疲勞は矢張睡眠に依て最も良く恢復されるのであります。然らば何時間位睡眠すれば良いかと云ふ

に、これも一般の規則を立てる譯には參りません、けれども昔から八時間働いて、八時間休んで八時間眠るのが良いと申しますが、大概こんなことで宜しからうと思ひます。併し仕事と休息との交換と云ふ所で、仕事する時はしつかり働き、休息するときは、全くその仕事を離れて休む、只ぶら／＼して休むでもなく働くのでもないと云ふやうなのは最も不利益なる方法であることを申しましたが、睡眠に就ても同樣で、うと／＼して夢を見て居る睡は餘り效能がないのであります。睡るかさうでなければ醒めて居るやうにしなければなりません。それから眠る時につきましても、如何なる時間が最も良いかと云ふことは一寸決定し難いのですが、夜半前の睡眠は夜半後に、四時間睡眠しただけの效力があると申します。實際早く寢て早く起ると云ふ昔からの規則は衞生上守るべき良方法として宜いのであります。けれども少も夢を見るやうな事がなくぐつすり睡込むならば、夜遲くなつてから牀に入つて、朝少々遲く起きても別に害はありません。精神的の仕事に從事して居る人に取りましては、夜早く寢ると云ふことは、一寸遵奉し難いことであります、此種の人は夜の九時から十一時位までの間が最も能く落著いて精神をその仕事に聚注することが出來るものでありまして、朝早く起れば精神は爽快で活潑でありますから、何事でも能く出來る理屈でありますけれども、とかく朝と云ふものは、その日の中に爲なければならぬ仕事について種々の考が一時に頭の中に浮で來るものですから、時間が限られて居て忙しい感じが致しまして、餘り落著いて一の仕事にかゝることは出來ないものであります。それですから斯ふ云ふ人は大抵曉方になつてから初めて熟睡するものであります、此等の人の朝寢を中絶させやうと云ふのは、少少無理なことであります。

若し何か譯があつて、眠らうとしても、どうしても睡付けぬことがありましたならば、普通の睡眠時間よりも遲くまで起きて居て、それから牀に就いても

眠れぬ時には、只靜に牀に横はつて居るだけでも身體は休まると云ふ考で、餘り眠らうと勉めぬ方がよい、強いて眠らうと思ふと、その眠れぬと思ふことが氣になつて益々睡れぬものであります。

それでありますから餘り牀の中で輾げ廻らず、成べく何も考へぬやうにすればよいので有りますが、それも出來なければ、何か一つたけの事を考へて居れば早く睡れるものであります。

倘午睡に就て一言申添へて置きますが、午睡も十五分か三十分位でありますれば、確に興奮して居る神經を鎭めて、身心の疲勞を恢復する效能が有るものでありますけれ共、午睡の後で氣分が惡かつたり、頭痛がすると云ふ人も尠くありませぬ、これは大概午睡の時間が長過るのでありますけれども、僅十五分位睡つただけでも倘頭痛がすると云ふ人もあります、斯ういふ人は已を得ずこの善良なる習慣も止めなければなりません。

以上のことを一言に申しますれば、つまり作業と、休息と、睡眠時間を秩序正敷區分しなければなりません、而して身體の爲に、必要な事だけを缺かないならば、仕事の時間中は隨分劇敷働いて、力を一ばいにいれる事が出來ます。

（以下次號）



質疑

問● 私儀生來非常に頑固なる便祕にて困居候、可然療法雜誌上にて御教示に預り度御依賴申上候。

矢島　某子

答● 便祕に就ては、五月發行の本誌、第二百四十六號に質疑應答がありますから就て御覽を願ひます、倘ほ來月發行の本誌には便祕について詳しいお話が掲載さるゝ筈ですから御待を願ひます。

雜報



○東京市の傳染病

本年夏の初より非常の勢で流行した腸窒扶斯も一時衰へたが、又々盛になりそうな形勢を示して、昨今は毎日二三十名の新患者を出し、それに赤痢も加はつて來た、即ち腸窒扶斯が三十名赤痢が十名内外の割合で、市中一般何れの區にも流行して居る、特に水害地の下谷、淺草、本所の三區は最も數が多い、本鄕區も始より多數の患者を出して居る、今現在の患者數を聞くに市立病院に赤痢が九十四名、腸窒扶斯が三百九十一名、其他の病院に赤痢が六十四名、腸窒扶斯三百十二名、自宅治療は赤痢四十八名、腸窒扶斯六十一名、合計赤痢が二百六、腸窒扶斯が七百六十四名に達し、本年七月以降の累計は赤痢六百十二名にて前年より二百四十四名多く、腸窒扶斯は三千三百六十三名にて前年に比して二千三百九名の多數に上つて居る、本年は兎角氣候が不順で、昨今は急に冷氣を催して來た、各自衛生上に餘程注意しなければ、なか〳〵此の流行が止みそうにもない。

○施療所の繁昌

東京養育院にては水害後の貧窮なる病人の爲に、深川、本所、淺草、下谷の各區に一個所づゝ施療所を設け、本月一日より向ふ五箇月間無料にて診療することゝしたが、施療券は豫め區役所、衛生組合に依託して置き、患者はこれを貰ふて治療を乞ひに來る、朝は五時頃より集つて來るが、午前八時より番號札を渡して順次に診察投藥して居る、患者數が多い爲めに事務員は非常に忙しいとのことである、實際その數を聞くに、深川は九日迄に新患者と再來とで八百八十人、本所は九日までに千二百三十五人、毎日平均百二三十人づゝ來るが、頗る成績が佳いので、醫師も患者も大に悦んで居るとのことである。

○癌腫死亡者

癌腫は結核と共に非常に多い惡性の病氣であるが、我國ではどちらも年々増加する傾がある、內閣統計局の調査によると、癌腫の爲に死亡した者が去る三十九年には二萬七千二百八十六人、四十年には二萬七千八百三十五人ある、四十一年と四十二年度の統計は未だ出來て居ないが、確かにこれよりも多くなつて居るに相違ないと云ふ。

○寄贈品の注意

先月末深川區役所の一吏員が、水害の爲に毎日同情者から寄贈されたる衣類物品を取扱つて居つたが、兩手に疥癬の如き惡疾を發して、それから三日目には全身に病毒が廻りて容易ならざる容態となつたので、警視廳からは檢疫醫が出張して、多數の吏員に傳染してはかなはぬと云ふので豫防法を行ふたと云ふことである、如何なる物から感染したかは分からぬけれども、折角の同情に出て寄贈された物品から病毒に感染するやうでは、贈つた人も受けたものも甚だ迷惑で、恩も仇になる譯であるから、贈る人も古物は斯る危險のないやうにして贈り、受けたものも物に依て煮沸するなり日光消毒をするなりして用ゆることが肝要である。

○兒童結核試驗成績

福岡醫科大學小兒科敎授伊東博士が、先月二十五日より、福岡市內の小學兒童について結核の試驗を始めたそうであるが、初日の試驗成績を見るに、此日は博多上呉服女子尋常校六學年生に少數の四學年生を混せて三十四名、これに附添敎員四名であつたが、兒童中この結核試驗に反應を現はしたものが二十二名で、全數の殆ど三分の二、敎員四名の中三名は反應を呈した、併し反應ある者は悉く現在に結核菌を宿して居ると云ふ譯ではない、既に結核菌の全滅して居るものもある、今回試驗をした三名の敎員の如きも既に過去に於て自然に結核菌の撲滅された者で、兒童の多數も矢張結核の已に全滅したもの、若くは腺とか腹膜のやうな他に傳染する虞のない部分

の結核で、實際これが爲に登校を禁じなければならぬやうなものは至て稀だと云はれたそうだ。

○炒豆の注意

豌豆、蠶豆、青豆、大豆などを炒て、これに砂糖や食鹽を塗けて賣て居る、その食鹽や砂糖には從來饂飩粉を混せて衣としたものである、然るに近頃になつては饂飩粉の代りに、七ツ剝と稱して炭酸石灰、炭酸マグチシアより成る所謂胡粉、または牡蠣、或はクレーと云ふて製紙その他の工業に使ふ所の硅酸礬土より成る白土などを用ふるものが多いので、これは衛生上宜しくないから警視廳ではこれらの豆類を檢査して、その處分について考中であるとのこと。

○脱脂煉乳

これまで我國には脱脂煉乳と云ふものは殆ど無かつたのであるが、近來は輸入品にも內國製のものにも脱脂煉乳が多くなつて來た、これは本年五月に改正された牛乳營業取締規則に據つて、脱脂煉乳と明記しなければならぬ筈であるのに、歐文で微かにその旨を記載してるのみのものがある、或はこれを知つても知らぬふりをして、安價い煉乳として賣るから、買ふ人は普通のコンデンスミルクと思ふて、これを小兒の哺育用に供してる居るも尠くない、脱脂乳は名の如く牛乳中の脂肪を大部分除いたものであるから、病氣に依つては特にこれを擇ぶこともあるけれども、普通小兒の哺育用としては脂肪が不足でその榮養價は甚だ少ないので、これを知らずに通常の牛乳から製したものと思ふて用ひて居つては、小兒の發育に大障碍を來すから注意せねばならぬ。

○東京市學童の體格

本年の春、東京市各學校の四歳から十七歳までの兒童に就て體格檢査を行ふた所が、その成績は左の如くで、殆ど三分の二は故障があつた、而して眼病と齲齒が最も多い。

檢査總人員	一二、三〇二三人
齲　齒	九、〇三九三人

眼疾　一、四六〇〇人
呼吸器病　二八一四人
耳疾　七三四六人

○看護婦の勲章受領

日露戰役の際、松山の捕虜病院に勤務したる勲八等門屋こふさ、小山ひさよ、加藤さよ、越智てるよの四看護婦は、當時コレスウエント艦長であつた故海軍大佐ワシリーボイスマン氏が捕虜となつて松山病院に於て療養中懇篤の看護をなせる功勞に依て、過般露西亞皇帝陛下より神聖スタニスラス綬附銀製記章を授與されたるが、何れも賞勲局より、その受領佩用を許されたる由なり。

西洋雜俎

○游泳浴

游泳の效能は誰も認めて居ることであるが、獨逸のアー、ウイットと云ふ人がその效能を數へ擧げて、皮膚の淸潔は申すに及ばす、この遊技は筋肉の働に有力の作用を及ぼして體力を强くし、敏活にし、性格を鍛へ、身體を强固にし、壓と温度の刺戟に依て有益の作用を呈するものであると云ふた、英國ではかういふやうな游泳浴法の效力を認めて、既に學校に於てその設備が出來たと云ふことである、著者は獨逸にも是非これをはやらせ學校で游泳法を敎へるやうにしたいものであるといふて居る。

○溺死者の胃袋

獨逸國ハンブルヒの港病院副院長のドクトル、レーフエンストルフと云ふ人が、ミユンヘン醫學雜誌に次のやうなことを書いて居る、乃ち水に溺れて死だものを見るに、多數の場合に於て、その胃袋に食物が充滿して居るのを發見することが多い、これは頗る著しい事實である、その原因に就ては全く明かでないけれども、思ふに胃が腹腔の中で擴がつて居るので隙がなくなつて、呼吸に極めて必要な横隔膜の働を著しく妨げる爲であらうと察せられる、これに依て、昔からよく言はるゝ、お腹の張つてる時

に湯に入るなと云ふことも思ひ合はさるゝと云ふた。

○男兒と女兒の發育

佛蘭西科學專門學校で、パリオとショームと云ふ人が男の兒と女の子の大きさと目方について調べて見たが、數千人の小兒に據つて確定し得た成績より次のようなことが分つた。乃ち女の兒は九歲までは男の兒よりも發育がわるいけれども、九歲から十二歲までは、同年齡の男の兒よりも餘程發育が早い。然し十歲になると復た男の兒に追ひつかれて、男の兒の方が發育の步を早めて來る。體重の關係に於ても矢張同樣で、八歲までは女の兒の方が男の兒よりも輕い、所が八歲から十五歲までは非常に目方がついて來る、然し十五歲から後になると、男の兒に比してその體重は再び減つて來るのである。

○小兒の理想

ある學者が、七歲から十六歲までのベルギーの小學兒童に依つて、小兒は何んな理想を懷いて居るかと云ふことに就て調べて、頗る興味ある事實を得た。それはその周圍の人或は自分の見聞した人の中で、如何なる人物の樣にならうと思ふかと云ふ問題を出して見た、而して稍〻年長の兒童には筆答させたのである。所が七歲までの小兒では、百人中六十人までは、まだ自分の父又は母が理想の人物である。年の進むに從つて、思想界が廣まつて來て、その判斷力も漸次獨立的になつて且つ銳敏になり、十三歲の小兒では、只一名だけが、飽くまで母を理想的人物として居つた。概して十一歲からになると男の兒は歷史上の英雄を以て理想とするが、女の兒では、百名中四十八名までは、やはりその周圍の人物中に理想の人を有つて居る。然るに玆に一つ著しいことは七歲から十六歲までの女の兒は、殆んど總て、その理想の人物を男の中に認めて居る、所が男の兒になると十一歲では、もはや百人中十人しか、女の中に理想の人物を認めて居るものはない、十二歲になつては一名もないことである。富貴と云ふことは、何

れの女の兒も餘程大切なことゝして居るが、男の兒は十三歳以上になること、更にこれを理想とせぬことが認められた。

○ハイカラ衞生

灰殼と云へば、近來は我邦でも名高いものであるが獨逸のベルリーンあたりでは、これをギブス繃帶（外科で骨折などの時に、その部を動かさぬやうに、石膏細工の如く固める繃帶）と渾名するそうである。何れの國でも餘り評判が好くないものと見えて、英國でもこれに似た評語がある、のみならず頗る眞面目な考を以て、近頃ロンドンの醫者が、衞生上の立場からして、このハイカラーに就て論じた書物を著はした。而してこのハイカラーの甚だ衞生上宜しくないもので、これが爲に種々の病氣が起ると云ふて居る。その說に依ると、頸に密著する、脊の高いカラーを著けて居るのは、殆んど緊紐と同様の害がある、誠に忌むべき惡風俗である、又このハイカラーは頸を絞める作用をして、その緣で以て頭の方から血を運んで來る所の頸の靜脈を壓迫し、この血液循環の妨げられる爲に、往々頭痛を起して來る、この頭痛は外には何にも原因がなく、全くハイカラーの爲に惹起される所のハイカラー頭痛である。尚ほハイカラーは項部の神經を壓迫して、その爲に神經の働を亢ぶらしめるものであると云ふて、種々實際上の例を擧げて盛にハイカラ攻擊をして居る。これは實にその通りであつて、餘り狹い高い立襟は、その有害作用を呈することも明である。そのやうな高い狹い襟をすると云ふことは、何も禮儀でもなければ、せねばならぬと云ふ義務などは勿論ない、けれどもこれが流行といふのである、所謂流行なるものである。

○錢の消毒

貨幣は病毒を傳播する危險があるから、これを豫防する爲に、官立の貨幣消毒所を設立せねばならぬと云ふ議論があつた。所が獨逸のドクトルマイエル此他の人々は、これに就て次のやうな說を述べて居る。

榮養物過剰の爲に身體を損ひ、アルロール常用に依て、生活に重要な器官の中毒を起し、尿酸沈澱を溜め、皮膚や肺の呼吸を制限し、筋肉の運動を顧みず總て此等のことを綜合して、その身體をあらゆる新陳代謝廢物の塵埃溜とし、その避くべからざる障碍に依て、遂に自滅すべきものが、一方に於て錢を消毒させるなどゝ云ふのは、矛盾してることである。種々の加答兒やその他の病氣を起す黴菌を穿鑿するが、左様な病氣に罹るのは、つまり血液がそれに熱して居ると云ふ意に外ならぬのであるから、病原菌搜索は少し控へるが宜からう。泥沼に生えてる植物は、泥沼を作る原因ではない。貨幣に依つて病毒を傳播すると云ふことは、實際に認めらるゝとしてもこれが爲に今直ちに錢の消毒をすると云ふは、偏頗な方法と云はなければなるまいと思ふ。この論法で行くと、同一の理由に依て、銀行手形の如きものは勿論のこと、財布、ガマグチ、否、鏦でも、靴でも消毒の必要がある、そればかりでなく、遂には呼吸氣も是非消毒する必要があるのである。

大日本婦人衞生會記事

○長與博士逝く

特別贊成員として本會の爲め直接間接に多大の援助を與へられたる東京胃腸病院長醫學博士長與稱吉氏は、嚴父故專齋翁の功勞に依り過般特に男爵を授けられたるは同家の榮譽として祝されたるに忽ちにして又この訃を傳ふ轉た哀悼の情に堪へず、葬儀は去る十一日に營まれたるが、本會よりは生花一對を供し總代これに會葬し會員一同に代りて恭しく哀悼の衷情を致せり。

○高崎支會通信

拜啓本年兎角雨天勝にて未曾有の大出水各地共其害多大なれば定めし會員諸姉中にも此不幸に會せしも多からんと存候隨て水害後の衞生は何處も多忙の

事と推測仕候當地水害は前代未聞に候て會員中浸水の不幸に會ひしは小島げん子蠍山きち子山田花子の三名なり其外損害を蒙りし會員は多數にて誠に御氣の毒の至に候扨會員異動は別紙の通に候先は當用而已　敬具

○本會入會者

○事務所申込

●神田區錦町三ノ一東京看護婦會ニテ　通常會員　佐々木かく子

○高田直子紹介

●山口縣佐波郡防府町字宮市　通常會員　德本さだ子

●山口縣佐波郡三田尻上町　通常會員　木梨直子

○事務所申込

●肥前國唐津郵便局交換室内　通常會員　松浦その子

●三重縣志摩郡磯部村　贊成員　杉山馨

○立井かをる子紹介

●沖繩縣那覇區東一五四一　通常會員　田中芳子

●同　四一三六六　同　宮城たと子

●同　松尾山官舍　同　加藤あさ子

○山形支會入會者

○江尻しむ子紹介

●　通常會員　佐藤しげ子

●　通常會員　平賀里子

●　通常會員　須藤さみ子

●　通常會員　永井けい子

○改姓

●舊　熊倉くす子　改め　腰塚くす子

○轉居

●廣島市竹屋町二十三へ　林くま子

●小石川區早稻田鶴卷町へ　山尾うら子

●廣島市下柳町七ノ十八へ　山梨識子

●鳥取市御弓町へ　伊垣かう子

●朝鮮京城大和町一ノ一四四へ　土屋とり子

●和歌山縣海草郡有功村字園部へ　川口直子

●赤坂區青山原宿一七一へ　大槻晴子

●小石川區小石川原町三一へ　川村くら子

タカヂアスターゼ

●**消化不良**に就て熊本醫學專門學校長**谷口博士**は曰く、澱粉不消化の徴候たる胃の膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘、前頭部疼痛及下痢を生じ營養不充分なるが爲め筋肉及體力を喪失する者はタカヂアスターゼを用ひ快速に治するを得べしと、又**長與**本邦消化機病學の泰斗**博士**は曰く、予の實驗に依ればタカヂアスターゼは獨り胃の澱粉不消化を治するに有要なるのみならず慢性下痢に於ける腸不消化をも治するに適當なるを信ずと、

信ずべき統計に徵すれば消化不良の七割五分は實に澱粉不消化に起因すればタカヂアスターゼは胃腸障害に對する最も有力なる藥物なり。

タカヂアスターゼ發賣元三共合資會社は東京市日本橋區南茅場町より同區室町三丁目へ移轉せり從て當分本劑の包裝には新舊町名番地のもの混同して販賣せらる孰れも眞正品なり

●世に幾多の摸造品及類似品あり**高峰博士發見の**タカヂアスターゼを求めんには必ずタカヂアスターゼと御指定あるべし各地の信用ある藥舗にて取次販賣す



●**消化力强**大なるは總てのヂアスターゼ劑中タカヂアスターゼを第一位と爲す近く官報を以て發表せられたる**本田博士**の學位論文に徵するに坊間に販かる、多くのヂアスターゼはタカヂアスターゼに比し**數倍**乃至**十數倍**を用ゆるにあらざれば之と同効を收め難きなり、此くの如きは高峰博士の製法が他の總てに超絕して完全なるに由るものにして、これ以て一は**眞正品**他は**摸造類似品**たることを區別し得るなり、

タカヂアスターゼの說明書は發賣元たる東京市日本橋區室町三丁目拾番地三共合資會社へ御申越に從ひ無代郵送す

●**營養增進**の目的を以て虛弱者貧血者重病者等にタカヂアスターゼを用ゆれば能く消化を佳良にし營養自ら增進し體力速に恢復し殊に**肺結核**患者之に應用すれば其効力著明なりされば大阪高等醫學校長**佐多博士**は曰く、タカヂアスターゼは予が數年來肺結核患者の消化補給劑として用ひ有効を認めたる所とすと、又在京の**栗本博士**は曰く今や予は實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著効を確認すと、**柴山博士**にも亦此目的にタカヂアスターゼを使用したる結果多大の良成績を擧けたることを公示せられたり

●**藥効均等**論は輓近醫學者間に唱道せらる、所なり、内務省橫濱衛生試驗所長**西崎藥學士**の研究論文中に曰く、タカヂアスターゼは各購求の時日と場所とを異にするものなれども其糖化の効力は固よりグリカーゼの効力も亦常に一定せりとタカヂアスターゼの効力毎常一定なるは其特長なりこれパークデビス社の如き規模の宏大なる者に於て始めて見るべきのみ。

●タカヂアスターゼの用量は一回〇・二—〇・三錠劑(〇・一—三)なれば一錠—二錠毎食後直に投與すべし而して此用量はタカヂアスターゼにのみ限ることを特に言明す

廣告

一、本會の例會には神田一ッ橋通り共立女子職業學校の講堂を以て會場に充て來り候處、十月例會に限り芝三田四國町東京高等女學校内に開催致候事

一、從來市内の會員諸姉には特に例會毎に通知書差出候處今後は特別の場合の外は通知書差出不申候間例會につきては毎月の本誌上にて御承知被下度候事

一、婦人衛生雜誌四十年度以降の分少々餘分有之候間會員には一部金五錢の割合を以て頒布致し候に付き希望の方は至急當事務所迄御申込有之度候事

私立大日本婦人衛生會

虐待兒救護

何所にでもこれあらば知らせて下さい

報知する人は氏名を要せず電話でも先拂郵便でも宜し虐待事故の所番地と氏名さへわかれば宜し

東京出獄人保護所　原胤昭

神田區元柳原町

電話本二九五六

母と子

全二冊半紙判定價壹圓
郵税市内四錢地方八錢

原胤昭著　博文館發行　原方にても販賣

△何うしたら子供はよく躾けられるか▽

本雜誌の第二百四十四號に子供の心の衛生と題して寄稿したる如く世の母たり姉たる人の必讀の家庭の讀本

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し

○通常會員章

第參號　メッキ製拾貳錢、送費六錢

第貳號　正銀製四拾錢、送費六錢

○終身及特別會員章

第壹號　七拾錢（黒塗箱入送費九錢）　六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會竝に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

○入會注意

○御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼ね會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納附相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麹町區富士見町郵便局）宛振出しあるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

○會員御紹介

下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

本誌一部　定價貳拾錢

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾四圓半頁其二分一以下同之

東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地
發行所　私立大日本婦人衛生會
（振替貯金口座東京一〇六〇〇番）

東京市本郷區駒込追分町三十番地
編輯兼發行者　莊司秋次郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷者　今井甚太郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷所　杏林舍

明治四十三年九月十六日印刷
明治四十三年九月二十日發行
婦人衛生雜誌第二百五十號
（毎月一回二十日發行）